

---

# 〔 電腦世界で踊れ 〕

アンデルセン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「**電腦世界で踊れ**」

### 【Nコード】

N7008T

### 【作者名】

アンデルセン

### 【あらすじ】

ヴァーチャルシステムが完成してからそれなりの時間を経た未来。更に踏み込み電腦化技術が進み、一昔前の空想が現実となる。そこで最新VRMMORPG、“Outer World Online”が発売される。今までとは一線を画した内容に、第二世代と言われ期待されていたゲーム。主人公も待ちに待ったソレをプレイするのだが……

## 第一話 プロローグ その一（前書き）

タグは見よう。一人称の練習がしたかった。ならばと最近流行りのVRMMOモノに触手を伸ばしてみただけ。

あらずじは適当。そのうち変えるかもしれない。地雷臭が凄い。実際微妙に斜め方向に行く可能性は否定出来ません。それでもよかつたらどうぞ。

一応文章そのものは作者の力量の範囲で普通に書いてます

## 第一話 プロローグ その一

世界は緋色に染まっていた。いや、それは正確な表現ではない。実際には俺が見渡す高台から遠く離れた城下町の外、広大な台地を埋める“魔物の軍勢”の上げる大規模な狼煙が原因だ。

周りに聳える中世風ゴシック調に酷似した建築物。その中でも一層高い塔の最上階から、“俺達”は最後の日、この“黄昏<sup>ラッナロク</sup>たる終日”を見ていた。

「思えば長い付き合いになったものだね」

ふと掛けられた声に後ろを振り返ると、複数名からなるこのパーティーメンバーの一人が一步、俺に近づいてきていた。

女性にしては高い、恐らくは百七十を越す身長。煌々と煌く炎を称えた髪色をしたロングストレート、クッキリとした目鼻立ち。

背中に背負われた長大な大剣、そんな無骨な剣に反して厚さの薄い、しかしながらもある程度の防御性能を残した軽金属の鎧やグリブ、ガントレット。俺達が彼女の為にかき集めた素材で作った、“伝説級<sup>レジェンド</sup>”の炎の属性を持つ最高レベルの剣は彼女の愛用品だ。

それを見るたびに少しだけ誇らしくなる。彼女に助けられたのは一度や二度じゃ利かない。その卓越した手腕から繰り出される驚異的一撃は、目の前に立ちほだかるいかなる障害をも吹き飛ばす。

「大丈夫ですわ、何せ私<sup>わたくし</sup>が居ますのよ？ 魔物の千や二千、私の呪文で吹き飛ばしてあげますわ」

そう言っただけでまた一人一步を踏み出して俺に歩み寄ってくる女性。

自信に満ち溢れた顔は、彼女のその不遜とも言える声音ですら許容出来る程に美しい。

百六十ちよいの身長を様々な色を織り込んだ不思議な術衣ロップで包み、その手には身長程もある、これまたレジェンドに連なる最高レベルの杖を握っている。

髪を頭部で一部纏め上げ、残りはそのまま後ろに流し、横髪を巻き髪にした黄金を思わせる金の頭髪。

まるでどこぞの貴族や姫を思わせる容姿の通り、彼女の拳動はどこか品があり、その出自が恐らく上流階級だろうことを匂わせる。無論、それを今まで聞いたことはない。

火力と言えば魔法。そしてそんな魔法を手足のように操る彼女の一撃は、まさしく軍勢ですら一息に蹴散らしてくれるだろう。

「まっ、補助はこの大天才たるあたしに任せておくんだね」

そう言つて別の一人が前に踏み出し胸を張る。残念ながら、前者二人のなかなか立派な胸部装甲と比べ、その夢の詰まつてなさそうな胸は酷くもの悲しい。

“大天才”それは彼女の口癖だ。流石にそれは言い過ぎかもしれないが、間違いなくその身に宿る才と知能は天才を冠するに値するだろう。

見た目十代を過ぎたばかりに見える、その小さな身を学者風の術衣ロップに包み、片手にはやや分厚い魔法書を抱え込んでいる。

幼い容姿ながら、意思の強さを思わせる整った顔立ち。将来はきっと目が覚めるような美人になるに違いない。

そんな小さな天才は俺達を後方からの確に支援してくれる、補助魔法のスペシャリスト。その秘めた力は俺達の能力を格段に強め、相手の能力を地の底まで叩き落す。

回復職の居ないパーティーだが、彼女の持つダメージ軽減や、一定時間回復付与の魔法があればなんの問題もなかった。

「カッカッカッ！ いやはや、この老骨たる身にこんな墓場を用意

してくれるとは、粹なことをしてくれるではないか。なに、既に枯れるのを待つだけの身、最後までらい盛大な花を咲かせて見せようではないか」

そう言つて最後の一人が俺の横に並んだ。俺より数センチだけ小さい、百八十ちよいの高身長。口調の通りの白髪の髪、髭ひげ。反して鍛え上げられた肉体は若々しく、彼が老人であると忘れてしまいうだ。

この若者と言つていい集まりの中で、飛びぬけて年齢の高い彼は、常に俺達にない経験と知識でパーティーを支えてくれた。

一応このパーティーのリーダーは俺であるのだが、経験豊かな彼には及ぶべくもなく、前にこの座を譲ろうとしたことがあるも、先は若い者が担うのだと辞退されてしまった。

頼れる彼の相棒は戦斧。老兵とは思えぬ臂力から繰り出される一撃は、相手の身体を一刀両断。その黒鉄に輝く斧もまた伝説に連なる一品。

俺を含めてこの五名。誰もが一騎当千であり、俺には勿体無い程の人達だ。だからこそ俺は卑下しない、自分を貶めない。

こんな素晴らしい仲間達の前に立つのなら、必然俺もまた一騎当千であるべきだ。そしてそうあるべきと、努力を重ねた。だからこそ、声を張り上げて今なら言える。

俺が、俺こそがこの“パーティー”のリーダーなのだ！ 積み重ねた努力は信頼に変わり、何時日か弱い自分は周到に鍛え上げた土台を元にした強き者へと変わっていた。

そして皆がまた努力を続けた。俺の、いや、俺達のこのパーティーは誰にも負けない。世界と比してもなお“最高”を誇るのだと声高々に俺は言えるだろう。

「ああ、生き残ろう。俺達はきつとまた会える。いや、確実に“会

う”んだ  
「

己に言い聞かせるように強く口し、腰元に佩いた一本の片手剣を抜き放つ！ シャリントツ と、涼やかな音を放ち抜かれた、一メートルに若干及ばない両刃の剣。

刀身が薄い空色に染まり、その剣自体が仄かに発光している。豪華な装飾が施されたこの剣こそ、皆が俺のために駆けずり回って用意してくれた最高の剣。

遙か古、俺達とは違う人類が築いたと言う超魔法文明の遺産の一つ。強力な付与能力を持つこれこそ、まさしく伝説を冠するに相応しいだろう。

「気軽に行こう。私達ならそう易々とやられやしないさ」

そう言って赤髪の、どこか騎士を思わせる彼女が俺の横に立つ。

「私達の力、見せて差し上げますわ」

何時の間にか反対にならび、遂に侵攻を開始した万を優に超す魔物を睨み付ける金髪の彼女。

「大天才のあたしが居るんだよ？ 誰一人失わせはしないよ」

にやりと笑い、ずり落ちそうになる眼鏡を押し上げ、その小さな身体に有り余る自信を滾らせる彼女。

「カカツ！ さあ、始めようではないか。後は主の一声だけぞ！」

皆の視線が俺に集まる。ただ一声を待っている。全員のその信頼が重い。けれども、同時に信頼は嬉しくもあり俺の力となってくれ

る。

すつと剣先を軍勢に向け、そのまま肺一杯に空気を溜め込む。さあ、行くぞ、俺達の存在を世界に刻むんだ！

「行くぞツ！ 闇夜の支配者のお披露目だツ！！」

ルライオフザナイト

「了解ツ！！」

同時、俺はこの高層建築物から“飛び出した”。地上から百メートル程の位置から助走なしで踏み込む。瞬く間に重力は俺を取り込み、風切音と共に一瞬で地表に到着。

強い衝撃が身を包むがそれだけだ。人外である俺は元より、人を優に超えた能力を持つ仲間も全員無事着地。俺は後ろも見ずに走り出す。

高速で流れ行く城下町の風景、多くの武装した人達を掻い潜り、魔物の層が最も分厚い正面北門に急ぐ。

一分少々で多くの冒険者、放浪者、騎士団やギルドが身構える北門を“俺達”は飛び出した。

誰よりも前に飛び出し、そのまま片手剣を右手、左手には盾を、全身にはフルプレートを着込んだまま大声を張り上げる。

「ラグナロクへの一番槍は、俺達ルライオフザナイト闇夜の支配者が頂いたぞツ！！」

告げた瞬間、そのまま地を蹴りだす。視界には地平線を埋める様々な魔物達。あちらもあちらで咆哮を上げ、矮小な人間を叩き潰そうと気合は十分だ。

俺の声に我こそはと次々と前に飛び出す多くの戦士達。だが遅い。既に俺は、いや、俺達は切り込み隊長もかくやの速度で既に魔物との距離を詰め終わっている！

「おおおおおおおおおおおッ！！」

気合一声、最大速度から運動エネルギーを全て剣先へ集約。それを乱暴に振りぬくと光輝くエネルギーが解放たれ、凶悪な横殴りの一撃と化し、そのまま数体の魔物を吹き飛ばす。

誰よりも早く、俺は一番槍を遂げる。ここに、俺達の命運を掛けた最後の晚餐が開始された……………

## 第一話 プロローグ その一（後書き）

後書き

プロローグを差し替え、旧一〜二をやや修正併合しました。

## 第二話 プロローグ その二

「バイパス 同調接続の切り離しを開始致します」

「……コンプリート。データのバックアップを保存します」

「スキャン 肉体的損傷の有無を確認致します」

「……健康状態であると確認されました。お疲れ様です、静かに外部装着具を外して下さい。なお……」

女性を模した合成音のアナウンスが告げ終わる前に、頭部に装着されているヘルメットを外す。

ゴテゴテとしたフルフェイスのメット。横に付属されているボタンを押せば「カシユツ」と、何とも言えない空気が抜ける音を発し、メットが縦の亀裂に沿って開く。

「ふう……」

それを手で広げれば思わず溜息が零れる。別にフルフェイス型のメットを長時間装着することで汗を欠いたとか、息苦しかった訳ではない。

簡易の空調設備が取り付けられているし、空気変換の静音ファンも標準装備されている。それでも人間てやつは狭苦しいところに居ると息苦しく、そして圧迫感を感じるものだ。

今回のもその人間らしい反応とそういう事。これはなにも俺だけの反応ではない。これを使う者の多くの同胞が抱える共通の悩みだろう。

「もうこんな時間なのか」

ベッドの頭に掛けてあるアンティークの柱時計。それに記された時刻が午後十六時過ぎを指していた。同時に空腹を訴える腹の虫。思い出せば今日は朝食しか取っていない。なるほど、これはお腹が空いたとしても当然の結果だ。

時間的には微妙だが、何か食べようと一先ずメットを脇にどける。後部で髪の毛のようにコードが束になっており結構邪魔臭い。

更に首の後ろに指を沿え、そこから伸びている“擬似神経子”ぎじしんけいし。通称“ニューロジャック”をそつと引き抜く。

瞬間、全身に微弱な静電気にも似た独特の痺れと脱力感が襲う。擬似神経子ニューロジャックを抜いた事で発生する幻痛だ。

既に何千回とも繰り返していることだが、それでもこの擬似神経子ニューロジャックの挿入と引き抜きは慣れない。

なんせ嫌な例えだがこの感覚は“癬”ニユーロジャックになりやすい。それも快樂的な意味でだ。これは別に擬似神経子のせいという訳ではないが。

実際の所は首筋にある接続の為の溝。そこに物体が触れる事で発生する現象である。非常に敏感な部分と言うのが理由。

お陰でハマツたやつらがそこに指を突っ込み損傷。一応は生態部品だからこそ起きる“炎症”や、特有の擬似神経症と呼ばれる病気を引き起こす馬鹿が絶えない。

現在色々解決策が探られている状態だが、なんせこの技術自体がかなりオーバーテクノロジーノゾー染みた部分がある上に、開発から既に十数年経つ癖に未だその体系は先に発展せずに“第一世代”ファースト。

治療法は簡単に分かったものの、精々発生する感覚を抑制するのが限界で、逆に感覚の増大をさとす技術とのイタチゴッコがまだまだ続けられている。

サイバードラッグ  
電脳麻薬に並ぶ違法技術だが、手を出す奴が多いのだから救いようがない。

「フツ……つつ！」

長時間ベッドに横になっていた影響か、身体がこっぴどくしょうがない。伸びをしたらバキバキと嫌な音が聞こえた。

一応ちよつとした目的の為に“鍛えて”はいるのだが、この時に感じる肉体の鈍り具合はお世辞にも気持ちの良いものではない。

先程までプレイしていたとあるゲームのオープンベータ最後の日、そして一大イベントのラグナロク。魔物と人の最後の戦争は実にご心躍った。

多くの人が倒れいく中、俺達はほぼ最後まで抗い、そして多くの魔物が消え行く途中で無念にもキルアウトしてしまう。その先どうなったかは分からない。

一応俺達以外にも僅かに残っていたギルドがあったし、案外魔物の掃討が叶ったかもしれないし、そのまま城下町が蹂躪されたのかもしれない。

考えても詮無い事だろう。どうせ一ヶ月ちよい先、正式稼働するんだ、仲間と再会したら聞けばいい。

「さてと。何か食えるものなんかあっただろうか」

無駄に広い中世時代を現代風にアレンジしたようなアンティーク調の部屋を出、そのままこれまたそれなりに広い餡色の板張りの床に、毛足の長い絨毯を敷き詰めた廊下を歩きつつ口にする。

と言うか、この家自体が贅沢な事に木製と合成建築材の混合であり、全体的なつくりがアンティークとなっていた。

今の時代、自然の木材は高級な建築材であり、少なくとも中流家庭層が手を出せるものじゃない。

別に俺の部屋だけがそう言う訳ではない。そもそもが自分の趣味と言う事でもなく、“譲られた”家がこれだったと言うのが正解だろう。

「あー。やっぱり何も入ってないな……」

僅か一センチ程度の厚さのドアを引いた中には飲み物、卵、その他数点の意味の無さそうな材料や、合成食材が鎮座していた。

科学の進歩によって小型化しつつも最大限スペースを利用出来るようになった冷蔵庫だが、中身が乏しければその有用性も発揮できない。

仕方なくリビングにあるソファアームに座り込み、そのまま横長の五千ピクセル長の大きなテレビの電源を入れる。

ホログラフ式のテレビもあるが、あれは半透明な事もあってどうも画像が見難い。個人的には液晶が気に入っている。

後ろに黒の不透明の何かでも置けばいいのだろうが、先入観でも言えばいいのか、食わず嫌いと言えばいいのか。

「……市、未明。今月になって十八人目になる電脳処理を受けた者の植物状態が確認されました。これは先月に比べて二名の増加であり、市長はこれに対して」

大きな家だが、住んでいるのは自分一人ともあってBGM代わりにテレビを付ければ丁度ニュースが流れる。

内容はよくあるものだ。この間なんて“フレイシハック電脳侵攻”されて死亡した者が居たと、ニュースで流れていた筈である。

電脳処理を受ける時、リスクの発生に関する書面には記入しているのだ、今更騒ぎ立てるのも馬鹿らしい。

保険も利くが、かなり高額だし、かならずしも治療が成功する訳でもないからメリットと比しても未だ電脳化は危険が伴う。

それでもその恩恵は魅力的であり、いわゆる“新人類”的な意味合いもあつて中流階級以上ではもっぱらステータスとなっている。成功率七十パーセント。失敗率二十九パーセント以上。残りが障害発生率。これは電腦化時における成功と失敗の目安だ。

「そうは言ってもパーセント的には下手な病気より余程確率は低い  
が」

そう口に出すも、それも気休めでしかないと理解している。奇病なんて掛かる率は低いが、電腦化に関しては申請の増加傾向にあるのだから、必然、失敗に合う人も増えていく。

実際、俺も一度失敗して、再度電腦化処理でようやく今の肉体となつた身だから人事ではなかつた。

「よし。とりあえずデリバリーで今日はいいか……」

ニユースが終わる頃合を見計らい、ジーンズに仕舞つてあつた小型の長方形の軽金属塊を取り出す。厚さ一センチ程度、色はつや消しの黒の物体。その右横に付いているコードを引っ張り出す。

そのまま首の後ろの常は人肌と変わらないスライド式の開閉部分を開き、そのまま溝に擬似神経子ニューロジャックを差し込む。

一瞬身体を走りぬける痺れ。一応感覚の鈍化処理を施してこれだ、ハマル奴の気持ちも分らないではない。

「この辺で美味しい飯なら……そう言えばカラミスとか言う店があつたな」

パスタ系から肉系まで、今時珍しい天然物を使った店を思い出す。その分値段は高く、高級志向の店だが問題はないだろう。

「あそこの接続コードは確か……」

記憶の海に沈んだアクセスコードを思い出し、そう言えばまだ端末の電源を入れてない事を思い出した。

指紋認証部分に指を走らせるとその手の平サイズの携帯機器の上部、機器の半分を占める液晶に淡い光が灯る。

同時に俺の思考に反応し、空中に仮想スクリーンが展開されていく。電脳化処理を施した“ファースト第一世代”には欠かせない必需品。

俗に“サイバーコネクト”を略し、サイコネと呼ばれている携帯情報機器だ。

「繋がったか」

思い出したアクセスコードは合っていたらしく、第六感とも言えるファースト特有の、相手の電脳端末に自分の意思が繋がる感覚を感じ取る。

それに同調し、空中に展開された実態を持たない半透明のホログラフスクリーンが内容を変化させていく。

僅かコンマ秒でスクリーンにはメニュー表が映された。洋風和風中華。中々に節操のない中味だが、いまや国境の壁は昔に比べ遙かに薄いことを考えればどうと言うこともない。

これから待っている。いや、待ちに待ったというべき“セカンダリ第二世代式VRMMORPG”へのアクセスを考えれば、ガッツリと腹を満たしておく方がいいだろう。

そう考え国内産の和牛を使った贅沢なステーキ定食を思考で操作し選んでいく。最後に清算の確認表示がスクリーンに表れ、それに同意すると同時に自動でネットからキャッシュが引かれる。

「注文が届くまで十数分てところか」

微妙な時間だ。代金は支払っている為、恐らくは玄関に備え付けられた差出口に置いといてもらえるだろうが、それでも時間が経てば冷めて味が悪くなってしまふ。

そう呟き繋いだままのニューロジャックを通してスクリーンを操作。表れた時刻は十七時前。食事に三十分掛かるとして、シャワーを浴びても寝るにはちょい早い。

アルファからベータテスト、そしてオープンテストと参加してきたとあるゲーム。その正式オープン日はまだ先だ。

リビングから玄関まで直通の廊下に向かう。玄関に向かって右手の扉を一つ開くと見えるのは脱衣場。一般家庭より広い脱衣場だが、残念ながら一人しか使わない為無駄も甚だしい。

「十五分程で済ませたいところだな」

風呂に掛かる時間を口にし、パパッとシャツにジーンズ。それに下着を脱ぎ散らかし全自動洗濯機に放り込めば、赤外線が重量と物に反応し勝手に起動する。

それを横目に風呂場のスライド式すりガラスのドアを開き、そのまま中に踏み込む。

白いタイル張りの床は広く、洗い場だけでも優に十名は入れる広さ。湯船も同等の大きさである。

まったくもって一人暮らしの俺の身には unnecessary のだが、洋式中、なぜか湯船は天然石の嵌め込みと和製なのが気に入っていた。

すりガラスの扉を閉め、横の液晶画面に触れて操作。すると一瞬

の間の後に、岩肌がむき出しとなった湯船に湯が溜まり始める。

出所を見れば岩肌の一箇所に小さな穴があり、そこから湯が流れ込んで見えるのが見えた。温度は四十三度、この速度ならそう時間も掛からず溜まるだろう。

曇り防止ガラスが一定間隔毎に嵌められ、椅子とシャワーが設置された一つに座り込み温めの湯を出す。

電脳化され、演算速度の増した脳が正確に時間の経過を知らせてくれる中、出来るだけ急いで俺は身体と頭を洗い、完全に溜まりきる前の湯船に浸かった……

時は瞬く間に過ぎ去り、遂に待ちに待ったVRMMORPGの正式稼動の日がやってきた。既に開始時刻の十八時に程近く、今からここ最近お気に入りの“カラミス”で頼んだ飯を取りに行くところだ。

風呂も済ませており既に準備は万端、夜通しだつてプレイ出来る。言わば自宅警備員とも言つていい俺は仕事には就いてないし、そもそもその必要もない。

両親は既に他界しているが、母も父も正直あまり情を覚える人達ではなかった。と、あまり思い出したくもない記憶が一瞬脳裏を過ぎり、俺は慌ててその思考を振り払う。

ただでさえ今回はステーキ。冷めてしまつと脂が固まつて味が数段落ちてしまう。

金に困つてないせいか、それなりに裕福な食事が取れる。逆に言えば下手な味では不快に思つてしまうのだから、なんとも微妙な話だ。

合成品の素材を使った食事もある。悪くはないのだが、や

はり天然物の方が美味しく思うのは固定観念なのか事実なのか。

パツパツと着替え、そのまま扉から廊下に出る。足首を包む柔らかな絨毯の感触が心地良い。そのまま数人は一度に靴を履ける玄関に出、革靴を履く。

見た目真鍮製の両開き式のレリーフの美しい扉。実際は表面だけで、内部は少し前の最新セキュリティ搭載の代物だ。

それをグツと押し開けば内部でカチャリと音が鳴り、そのまま自動で扉が一人で押し開かれる。

「珍しく今日は曇りか……」

気象に関してある程度の干渉が出来る現代。曇りと呼べる程の雨雲などが空を覆うのは珍しい。

更に言えば夕日が随分と大きいようだ。茜色に染まった空と雲が、なんとも言えない雰囲気を作り出している。

この辺りは言わば高級住宅街で。雑多なビルより一軒家が多い。お陰で夕日も見やすく、それに染まる景観がよく分かる。

昔から変わらない美しきモノの一つ。百年経とうが、千年経とうがあり続けるモノ。不変とすら思えるベージュの海は、酷く俺の心を刺激する。

「つと。こんな事している暇はなかったな」

中々にお目に掛かれない光景にどうやら安心してしまっていたらしい。

少なくとも間が悪ければ月単位でしか拝めない程度には、今の茜色に染まった世界は珍しい。

サイコネに示された時間が気づけば既に数分過ぎていた。

「柄にもなかつたかね、感傷に浸るなんて」

自分自身をそう皮肉り、今時滅多にはないが封筒などを入れる差込口。その下にある囚人などに差し入れをする時にも使う、引き出しにも似た大きな差し入れ口に乘せられた食器やトレイを取り出す。保温に優れた食器を使っており、なかなか冷める事もなく、料理が面倒な時にこのカラムスはここ最近重宝していた。

なんせこれからは時間がすべて。昔からVRMMORPGヴァーチャルリアリティマツシブリーマルチロールプレイングゲームなどのオンラインゲームはスタートダッシュ。ようは最初に稼いだプレイ時間がモノを言うと、そう相場が決まっている。

無論それは絶対ではないし、何事にも例外はつき物だが、それでもプレイ時間が多いほど有利なのは当然の理だ。

そんな中、自炊は貴重な時間を奪いかねない。予約注文なら時間の都合も出来てそんな心配もないだろうし、ここならある程度の時間は料理が冷める心配もないときた。

「小さいことだが、懸案が一つ消えたな」

そのままリビングまで戻り、飴色のオーク調の机にトレイを乗せる。

セット式の椅子に座り込む前に、冷蔵庫からコーカ・コーラを取り出し、リビングと一体化しているキッチンからグラスを取りなみなみと注ぐ。

かなり昔からある飲み物で、今でも根強い人気を誇る商品だ。かく言う俺も愛飲しているわけだが……

「さつとと。手早く食べて、何時でもログイン出来るようにしておかないと……」

なんせアルファ時代から楽しみにして待っていた、三年も待たされたゲームだ。これでログインに遅れたなんて事、ヴァーチャル式ゲーマーを自称する自分としては許せる筈もない。

逸早く、それこそ一番乗りを目指す気でログインし、そのままスタートダッシュ 正式稼動時に即座に先にゲームを進め、他者より有利な立場に立つ行為 を決めるつもりだ。

たかがゲームと侮る奴はそう思っていればいい。今回参加する“Outer World Online”は今までのVRMMORPG。つまりは仮想世界体験式ゲームと一線を画す機能を実装している。

なにせこのゲームの製作会社には電脳化技術を生み出した研究者、“マキナ教授”が居る。そして今回のアウターワールドオンラインにはそのマキナ教授の最新技術が導入されると言うじゃないか。

ベーターでもある自分がどうしてそんな疑問系なのか。それはその最新技術の目玉、“自己進化ロジック”がアルファからオープンベータまでの間に適用されていなかったからだ。

それでも他のゲームより一歩も二歩も素晴らしいものだったが、これが導入されればまさに世界が変わる。

今はまだ途中の完全なる電脳世界構築<sup>サイバーワールド</sup>。その強力な推進剤ともな  
りえる。

自己進化ロジック。詳しい事は俺もわからない。なんせその手の専門知識は人より少々齧っている程度だからだ。

それでも親戚から聞き出した情報から、それが電脳、仮想世界を構築するのに欠かせないAIを根本からぶち壊す代物だったのは理解出来た。

なにせAIにこれを適用することで、AIは無限の進化を歩むと

言うつんでもないものらしい。既にアウターワールドオンラインを統括するAIには三年前よりコレが適用され、噂によれば意思にも近いものを有するレベルにまで進化していると言う。

これが完全に一般企業にまで広まればVRS ヴァーチャルシステム 技術との融合で、あつと言う間に電脳世界は完成されるだろう。

親戚からの情報が本当ならば、軍事利用が確定されているらしいから近い将来。“電脳戦争”こそが戦争の要になる日が来るのかもしれない。

とにかく。この自己進化ロジックが正式では適用されている。それは今までどんなに高性能なAIでも感じた違和感などが減り、更に人間味を増す事を意味していよう。

それに伴い出現する生物 魔物含め 全てのリアル性の向上  
これはネットでも期待されていることだ。俺もその完成度に期待している一人に他ならない。

更に言えばAIの進化による圧倒的演算は、爆発的な速度でゲーム内を拡張していく効果すら齎す。大規模アップデート以外の小型アップデートは告知無しで、統括AIが自動で随時行うらしいのだから凄まじい。

人がゲームを作るのではなく、電脳アウターの申し子たるAIがゲームを作り出す。それこそが“Outer World Online”ワールド オンラインに他ならない。

「考え事をしていたせいか、何時の間にかこんな時間か」

ゲームに関係することを思い出していたら、既に食事が終わって

いたようだ。手元で無意識に動かしていたらしい箸の先、食器には一欠けらの肉すら残っていない。

味を感じる事もお陰でなかったがまあいいかと、サイコネに視線を向ければ時刻は残り十分程で十八時になることを示している。

「ふっ……くうっ！」

トレイや食器をキッチンの流しにある自動洗い機に置きボタンを押す。そのままグツと伸びをすれば身体からポキポキと小気味のよい音が鳴る。

部屋を出る時にもやったと言うのに、今度も中々に盛大だ。その内マツサージ専門店にでも顔を出した方がいいだろうか？

長時間身動きを拘束される電腦へのアクセスは、気を付けないと容易に筋肉の弱体化を招いてしまう。

「よしっ、行くかッ！」

気合一声。待ちに待った瞬間を前に己を鼓舞し、そのまま自室に引き上げる。古びた木製にも思える両開き式の扉。

見た目に反し、合成建築材で出来たそれはセキリユティー性及び、強度に優れ、生半可な衝撃では壊す事が出来ない。

勝手に特殊なセンサーが生体情報を読み込みロックが解除される音が響く。そのまま扉を押し開き、自分の部屋ながら、懐古主義な洋式の古めかしい部屋に苦笑が漏れる。

置かれている家具は全てアンティーク調。変えてもいいのだが、どれも一級品の調度だから処分するのは少々戸惑ってしまう。

このご時世、暖炉なんてある部屋、この辺りでは俺の家くらいかもしれない。ベッドなどは生意気に天蓋付きと来た。

この部屋の調度全てで中流家庭層の一般的な一軒家が買い取れる。

金と言うのはある所には有る、そう言うものだ。

「さつてと。今回の“ロールプレイ”はどうなるやら」

ロールプレイングゲーム。そう、“ロールプレイ”。名前の通り、演じる行為。俺は仮想世界体験式に限らず、オンライン式のゲームでは常にロールプレイを意識してきた。

幸い奇特的な才能もあいつて、自己暗示に近いレベルでソレが可能な俺にとつて、今では必要不可欠な要素と言えよう。

ベッドの横にある簡素ながら純木製の机に置いてあるボックス。そこに手を突っ込み、中に入っている紙切れを一枚素早く取り出すと、中に書かれた内容に目を通す。

「基本冷静かつ、戦隊的ノリで熱いキャラ……？」

思わず目が点となったことを許して欲しい。まさかこんな内容が出てくるとは思っていなかった。

確かに直ぐにネタが尽きないよう、色々入れた記憶があるが、こんなものまで昔の自分に入れていたのか。

クールで熱いと言う時点で、なんだか微妙に矛盾している気がするでもないでもない。そればかりか、戦隊的ノリときた。

あれか、レンジャー参上ッ！とか、そんな事だろうか？

正直類が引きつる思いだが、数年続けてきたマイルール。こんなことで破ろうとは思わない。イマイチ内容が把握し難い為、少々自己アレンジを加えるが構わないだろう。

冷静に考えてみれば悪くない。熱血系が嫌いな訳ではないし、た

まには熱い台詞でロールプレイするのも面白い。

「それじゃあログインするでしょう」

時刻は十八時前。昔のようにゲーム機を買うのではなく、“アクセス権”と呼ばれる十二桁のコードの書かれたデータを買う事で、ゲームへとアクセスする事が出来る。

待ちに待った第二世代とも呼べるゲーム。アウターワールドオンライン。それを前に高鳴る心臓の音。

ごくりと生唾を飲み込む音が響く。隠せない緊張。じわりと手の平に滲む汗。それでも震える手で演算補助を目的とし、生命活動の状態をリアルで読み込む“フルフェイス型メット”。正式名称サイバーフェイスに俺は手を伸ばした……

### 第三話 プロローグ その三(前書き)

ちよつと少ない。

基本一話の量は少ない予定なので、これよりやや多いくらいが本来のデフォルト。

### 第三話 プロローグ その三

サイバーフェイスを掴み、横の出っ張り。アナログ的にも、全時的にも思えるボタン式のスイッチを押し込む。「カシュツ」と音を立て、真上から罅のようなものが走り横に開閉される。

それを顔に押し当て、もう一度ボタンを押せば自動で閉まっていた。瞳に映る景色はやや黒いフィルターを通したような、色褪せた灰色の世界へと転じた。

額から鼻先まで覆う特殊な黒のバイザーの効果だ。そのままメツトの横に仕舞われたケーブル、ニューロジャックを引っ張り長さを調節。そのまま首筋のスライドを開き、先端の端子を差し込む。

「ッ……」

一瞬身体に流れる微弱な快楽とも似た痺れ。長い間正座した後のあの痺れに近いが、それより性的な快感が強い。

同時に肉体が“繋がった”と言う第一世代特有の、何とも言えない奇妙な感覚に包まれる。

世界に溶け込み、一つでありながらも個であるような、そんな奇妙な感覚。

「……ふう」

息をゆっくりと吐き出し、そのままベッドに横たわる。本来は専用の筐体の中でサイバーフェイスを使用するのだが、俺はあの閉じ込められているような狭い空間が好きじゃない。

しかも身を横たえる椅子は快適とは言い辛く、長時間の使用には向いていなかった。結果本来は歓迎されない事だが、本体とサイバーフェイスを筐体から取り外し、ベッドの脇に保管している。

見た目は普通のベッドだが、肉体の形に合わせ沈み込む骨格に優しい素材、スプリング。これなら長時間使用したって、早々肉体に影響を及ぼさない。

そのまま電源を押し。ファースト特有の感覚で電腦へと意識を向ける。サイコネを使用するのと同じだ。

するとバイザーに高速で英文字が流れ出す。暫くすると画面は検索ポイントで停止した。ここから通常のネットのように文字の検索も可能だが、今回はアクセスコードを使う。

「確か……」

アウターワールドの公式ホームページのアクセスコードを思い出し意識のみで打ち込む。バイザーに映る区画の中にそれらが表示され、完了と同時に公式に飛ぶ。

ゲームの説明や画像が飛び交う画面の中、ログインと書かれた部分に意識を向けた。すると矢印がそこに向かい、クリック。

画面は再び変化し、「アクセスコードを入力して下さい」と表示される。一週間前に通知された九七三八 三三六五 四〇九四と言う、一二桁からなるコードを意識のみで再び打ち込んでいく。

「よしッ」

思わず右拳を勢いよく握りこんでしまう。画面には認証完了の文字。その後画面には大きくNow loading……と表示され、末尾のパーセンテージが百に近づいていく。

僅か一分足らずで完了すると「ようこそOuter World Onlineへ。当ゲームは」と、その先には所謂同意事項が纏められていた。

それを電脳化による高速処理で脳に叩き込み、同意のボタンを意識上でクリック。画面は変化し「これよりOuter World

Onlineへログインします、よろしいですか？ yes/no  
〇と選択肢が分かれている。

意識を肉体に向けるが異常なし。電脳化した肉体は、己の肉体の  
バイタリテイもある程度把握することすら可能にした。

「それじゃあ第二世代と目されるその内容、楽しませて貰おう！」  
セカンド

気合一声、yesと書かれた項目をクリック。同時に画面は再び  
英文字が高速で流れ出す。それを横目に瞳を瞑れば、心地よい睡魔  
が肉体を蝕む。

データが電気信号にニューロジャックで変換され、そのまま脳内  
チップを通し脳を流れる。そこに眠りをさとす信号が追加された結  
果だ。

見る見るうちに意識は沈んでいく。僅か数十秒程で俺の意識は暗  
い水底へと沈んでいった……

「ようこそOuter World Onlineへ！！ ようこそ  
Outer World Onlineへっ！！」

何か声が聞こえる。甲高い、恐らくは少女だと思われる女性の声。

「ようっつこっつそっOuter World Onlineへっ！

「！」

「ッッ！？」

いきなり音量の上った声に思わず“飛び起きる”。慌てて回り  
を見渡せば三百六十度闇に包まれた世界。

その中で腰に手を当てた“トンガリ耳の少女”がぶんすか頬を膨らませ、怒り心頭といった様子だった。言葉に詰まる、俺は夢でも見ているのだろうか。

「だからッ！ Outer World Onlineへようこそって言ってるでしょッ！ 返事くらいしたらどうなのよ！！」

「あっ、ああ……」

「まったくもお。人間てみんなそんなんなの？ チュートリアルを説明する私の身にもなって欲しいのだけれども」

さて、今聞き逃せない言葉が聞こえたぞ。“チュートリアル”だと？ それにアウターワールドオンライン……

それらが脳内で混ざり合った瞬間。背中にジツトリと汗が浮かぶような感覚を覚える。実際にはそんなことはない。

なにせ今の俺はここが予想通り“中継点”なら、肉体を持たない俗に言う“仮想体”、もしくは“電脳体”と呼ばれる非実体存在の筈だからだ。

何やら一人で喚いている少女を横に、腕を翳せば予想通りの真っ白で質感も質量も感じさせない手が視界に映る。これが今の俺の身体イタクと言う事だ。

そう、夢じゃない。ここは間違いなく電脳世界。そして他のサーバへと移動する為の入り口、もしくは中継点。

では、そう、ではだ。目の前の少女はその言動からチュートリアル用のNPC。つまりはノンプレイヤーキャラクターである筈。

視線を少女に向ける。身長百五十未満。スレンダーな肉体と引き換えに胸を犠牲にしまったのか、非常にその胸部装甲は慎ましい。

服装はドレスに皮製のアーマーを所々当てたような、現代ではま

ず見られないものだし、背中には矢筒に弓が見える。

金色の髪はツインテールで結ばれ、大きな瞳は勝気な釣り目を描き、見事な海の色を孕んでいる。最大の特徴であるトンガリ耳は長く、明らかに十センチ程はあるだろうか。

真つ白な肌は日本人どころか、外国人ですらそう見られないレベル。あれだ。俗に言う“エルフ”とか呼ばれる種族。

無論、地球にそんな種は居ない。空想の産物だ。そんな存在がどうみても“人と変わらない”様子で喋っている。

その服装に耳がなければ、きっと俺は彼女をプレイヤーか雇われのスタッフだと信じ込んだだろう。それくらい目の前で何やらきゃんきゃん喚く少女は、感情豊かで人と変わらないように見えた。

（これが、これが“自己進化ロジック”の齎した影響だって言うのか……マキナ教授、貴方は一体何者なんだ……）

そう戦慄を覚えてしまいうくらい、怖気を感じるくらいにその効果は予想を超えている。正直に言って、ここまでとは思っていなかったし、可能だとも思っていなかった。

過去の偉人と比べても、恐らくトップレベルの偉業をマキナ教授は行ったが。今回のコレもそれに負けずと劣らない。

「うー……リリ、何か悪い事したかしら？」

茫然自失としている耳に届くどこか恨めしげな声。抑揚に溢れた合成音声では中々出来ない人間味に溢れた“感情”ある声音。

その目尻に涙を浮かべる少女。小粒の雫。それが見る見る内に大きくなり、表面張力を突破しようとした瞬間

「あー、悪かった。すまない。少しログインの影響か、ぼあっとし

てたようだ」

勝手に口にしていた。年下の女性に、特に女の子と言ってよい年齢の娘に泣かれるのは困る。親戚にあたる本家筋の双子を思い出してしまっからだ。

そして口にしてから気づく。

(何をNPCに言っているんだ俺は)

溜息が零れる。相手はいくら人間と変わらないように見えたとしても、命を持たない。所詮はプログラムで動くNPC。

それをまるで人間を相手にするように、慰めるかのような、言い訳するかのような言葉を口にするとは、なんて滑稽。

「ふーん。まあいいわ。それじゃあ早速チュートリア」

「それなら必要ない。オープンベータと内容は変わらないなら、これから行うキャラクターのメイキングや世界観に関してだろう？」

俺は一応アルファからの参加者だからな、その辺は熟知している」

そう俺が口になると、目に見えて少女の眉が釣り上がった。キリリリ と、擬音が聞こえてきそうだ。

と言うより、先程の態度はまさか真似だったのか。設定に小悪魔なんてあるんじゃないのかと疑ってしまいそうになる。

「は、初の案内相手がテスト参加者なんて……はあっ……まあいいわ。それじゃあデータを照合するから待ってて」

そう言つと少女は動かなくなる。まるで彫像のようにピタリと停止してしまう。瞳は見開いているのに、瞬き一つしなくなった姿は、先程まで生気に溢れていただけに非常に不気味である。

あえて表現すれば、データの参照による過負荷が原因のフリーズと言った所だろうか。もしかしたら負荷削減の行動かもしれないが。

「あつ、確認が取れたよ！ データを投影するから確認してよね」

少女が人差し指を宙に向けると巨大なホログラフ式スクリーンが展開され、そこに“一人”のキャラクターが映される。

今のご時世珍しい混じりつけなしの黒の長髪。長いそれは背中の中半ばまで伸びている。オールバックにされているのだが、数束だけ前に落ちて額や頬に流れている。

彫りの深い顔立ちは西洋的ながら、瞳は切れ長でどこか東洋的な感じだ。その色は俺とは違い髪色と同じ黒。鼻筋は西洋的に高く整い、薄い唇は引き結ばれているものの、ニヒルな笑みが似合いそうである。

全体的に理知的な装いを見せる、客観的に言えば端整と称してなら疑問を抱かない顔立ち。そもそもが俺の顔だ。

微妙に弄ってはいいるが、基本的にVRMMORPGの半分以上は己の顔をベースに多少弄れるだけで、大幅な変更が利かない仕様となっている。このアバターワールドオンラインもその一つだ。

その理由までは俺の知るところではないが、それでも色合いやタトゥなどかなり誤魔化しは利くものだから問題はないだろう。

身長も同じく現実の誤差±十センチ内で設定するようになっていく。俺の現実の身長は百八十七センチ。特に変える必要もなかった為そのままだ。

と言うより、基本的に俺はゲームで使用する分身アバターの見た目を現実からさほど弄らない。何か理由があるのではなく面倒くさいだけだが……

ハーフだからか、八頭身で細身の肉体ながらもバランスが取れている。服装は旅人の服と呼ばれる、頑丈な衣服だ。初期装備の防具だった筈だと思いつく。

「へえー……あんまり元から弄ってないのね。中々悪くないじゃない。私は好きよ？」

俺の分アバター身体をジロジロ眺めていたりりと自分を呼称した少女だが、どうやら褒められているらしい。

AI風情に容姿を褒められても言わば社交辞令。今までならそう思っただろうが、彼女ならそう悪い気もしないのは豊かな感情を感じられるからか。

「今時顔の容姿に大きな意味なんてないさ。金さえあればほぼ思っ  
とおりの容姿が手に入るんだからな」

百年だか前に施行された法律で、整形時の料金は国が定めた規定に沿うようになっていた。具体的に言えば、大体過去から比して二倍以上。

場合によっては数倍以上もの金額。その代わり新たに導入された技術のお陰で、ほぼ理想の容姿フェイスが手に入る。

誰が言ったのだったか、容姿の整った人物の五割近くは整形だと思えと言われるくらいだ。実際、整った容姿が飽和してしまい、ここ十年近くは容姿を“弄ってない”と言うのが新たなステータスに代わりつつある。

「あなたも金で顔を買ったの？」

「いや、俺の場合は元々だ」

「……まっ、私には関係ないことね。それじゃあ次の設定に移るか

ら、パツパと進むわよ」

言われて気づく。未だ設定が殆ど進んでいない事に。元より反対する理由もなく、「ああ」と頷き、彼女　　リリに言われるがまま次々と設定を終えていく。

流石に確認やゲーム関連の間は大人しくするよう設定されているのか、真摯な声音で逐一決定事項を確認してくる様は“NPCらしく”どこか安心させてくれる。

そう思う時点でどうかしていると言えるかもしれないが……  
オープンベータ時のデータを引き継いでいるから大部分をカットしつつ。それでもベータとオープン参加の“特典”やその他一部変更を行うこと約十五分。

「それじゃあ、最終確認に移るわよ。先ず、キャラクター名は『シヤノン』でよかったかしら？」  
「問題ない」

シヤノンは本名だ。性こそ日本名だが、名は一応横文字。英式で付けられている。

「種族は『動く死体<sup>リビングデット</sup>』。初期職業は全員『放浪者』よ。習得パツシブスキルは『戦闘経験』『肉体運用』『堅牢な肉体』『拳の才能』『脅威のタフネス』の五つ。内二つ、拳の才能と肉体運用はオープンベータの特典での再抽選。以上で間違いはない？」

種族はそのままキャラクターの属する種。今時珍しくもないが、多種多様に溢れ、中には所謂“人外”と呼ばれる種も多い。

リビングデットもその一つ。実はオープンベータでも選んでいた種で、“成長種”と呼ばれる少し特殊な種族だ。初期ステータスや

制約を持つ代わりに、一定の条件でクラスアップ。

上位種族へと成長することが出来る。言わば大器晩成型の玄人向けと言った所だろうか。因みにリビングデットの制約は取得経験値マイナス十パーセント減少。回復魔法反転。回復せずダメージとなる。

他にも日中の間HP ヒットポイント の自然回復停止などなど……一応メリットもあるが割愛しておく。

<sup>クラス</sup>職業はそのままだ。戦士や弓兵などの他にも、学者、英雄、鍛冶師などこれまた多様に溢れている。

オープンベータでは二次職業 現在の職業から条件を満たすと上位の職業にクラスアップ出来、最初の初期から何か職に就いたのを一次、その上位を二次と数えていく。までだったが、公式の告知通りなら三次職業が解放されている筈だ。

パッシブスキル。特に“特殊パッシブ”と呼ばれる、成長に関するスキルは十個まで習得出来、キャラメイク時に選択肢に見合った内容からランダムで選ばれる。

オープンベータの特典はこれの再抽選権だ。よくよく考えれば運が混じるものの、かなりアドバンテージ性の強い報酬と言えるだろう。

因みにキャラクターの削除、メイキングによるスキルの選別と言うコンボは出来ない。一応初期では二つのキャラスロットがあるから、片方を食い潰していいのならそれも可能ではある。

実は俺もその口だったりするが、それでもそこその運だったと今でも思う。今回引いたスキルも、名前から大体の効力が察せられるが悪く無さそうだ。

「大丈夫だ、問題ない」

「そ。じゃあ」

その後も次々と確認は続き、主観時間にして実に十分ちよっとも費やされることとなった。全ての確認が終了し、ようやく今度こそ正真正銘アウターワールドへログインするだけのところまで来る。

「お疲れ様。これでキャラクターメイキングは終わりよ。それじゃあ、今からアウターワールドへ接続するから、リラックスしてね」

リリがそう口にするのと同時、俺の周囲が光だし、光の乱舞が満ち溢れる。見れば身体の末端が光子となって崩れ去っているのが見えた。

普通なら驚くかもしれないが、これはサーバー間の移動に伴う現象。ファーストなら、特にVR式ゲームなら経験していて当たり前。俺にとっても既に幾度となく見慣れた光景である。

同時に意識が霞んでいく。眠気にも似ているが、実際は自己を構成するデータ群の崩壊が招く減少だ。

ふと。このまま恐らく二度と会えない彼女、リリにこのまま何も言わないのはどうだろうかと考える。

AIとは言え、少なくとも人となんら変わらないくらいには見事な思考ルーチンと言えた。だからだろう。気づけば俺の口は勝手に言葉を紡ぎだしていた。

「リリ、ありがとう」

いよいよ漂白されるように霧散していく意識、視界の中で、リリが驚いたような顔を見せる。やはり仕草一つとっても人間らしい。

「私こそ、最初の案内人が貴方でよかったわ。まっ、精々頑張りなさいよね」

末尾まで聞き取れなかったが、それでも最後に彼女が浮かべた柔らかな笑みを、俺は暫く忘れる事が出来なさそうだった……

## 第三話 プロローグ その三（後書き）

後書き

プロローグは二話毎で併合しました。

## 第五話 チュートリアル その一

意識が完全に空白に飲み込まれた後。気づけば俺は豪華な部屋の一室、血溜まりの中で倒れ伏していた。同時に感じる微妙な倦怠感と、不思議な高揚感。

(つつ……目が覚めたら知らない部屋で、しかも殺人現場の殺された被害者のような格好だな)

クリアになる思考。部屋中を満たす血臭に幾分気分が悪くなるが黙って黙殺。

グツと肉体に力をいれ起き上がる。大理石のような石が嵌め込まれた床。その一面一杯に飛び散った血液が俺のものだと、そう訴えるかのような貧血によりりと立ち眩みを起こす。

それでもここが“記憶に無い場所”だと言うのは把握できた。そこから考えられるのは

「……まさか、バックストーリーはテストデータを引き継がないのか？」

何とかよろけつつも近くにある木製の品の良い椅子に座り込み口にする。

直ぐには歩けそうもない。完全データ化の世界だが、一昔と違い仮想世界のリアル度は比較にならないほど向上している。今俺が感じている貧血もその賜物だろう。

暫く椅子に座っているしかないと判断し、ついでに予想外の事態に思考を巡らせる。

恐らく今起きている事態はバックストーリーのせいだろう。バッ

クストーリー。その名の通り、過去話。あるいはその人物の背景の物語。

実はアウターワールドオンラインの目玉の一つに、この“バックストーリー”が挙げられる。これはメイキング作成後、その設定から一定の方向性が選択され、その中から更に細かいランダム組み合わせによる、キャラの“過去の物語”が作成されるのだ。

これによって開始地点がバラバラであるのだが、その膨大なデータ処理をここのメイン統括AIは苦もなく捌いているのだから凄まじい。

このバックストーリーなどによって“メインクエスト”がプレイヤーそれぞれで変化する。まさに自分だけの物語が綴られるのだ。

異なる世界の名前の通り。自分と言う世界の他に、プレイヤーの数だけ主人公と世界が存在してると言えた。

更に面白いのが。クエストなどでこの世界での知名度が上がったりすると、“他のプレイヤー”の“クエスト”などで自分の名前が出てきたりする。逆もしかりで、他のプレイヤーの名が自分のクエストに出たりもする。

時間軸によってかなり矛盾が生じたりするのだが、そこはお約束ゲームなのだからと言ったところなのだが、案内役のNPCの行動から思うに、他のNPCも甘く見ない方がいいだろう。見た目や話だけでプレイヤーと変わらない可能性も高く、間違えてしまう事もあるかもしれない。

まさかバックストーリーが変わるとは思っていなかったが、それはそれで悪くない。新たな“俺と言う”物語を楽しむだけだ。

思考していると貧血が治まってきた。立ち上がり改めて周囲を見渡す。雰囲気は自宅の寝室に近いが、それよりも華美で豪奢。何か

と言つと“理想”の中世時代の貴族の部屋と言つた風情か。

アウターワールドでの技術レベルは一言で言い表す事が出来ない。中世レベルの場所や、近代レベル、あるいは現代レベルのところもある。

世界観的には今の文明は通算三度目となつており、過去には超科学文明、超魔法文明。それぞれ黄金期、白銀期。そして今の時代をそれらが風化し消え、名残だけが残る“青銅期”と呼んでいる。

と、これはメイキング時に説明される世界創生をかなり端折つた内容だ。実際はもう少し複雑な事情が絡むのだが、面倒で俺はあまり覚えていない。

「メインクエスト“動く死体”<sup>リビングデット</sup>を受理しました。クエスト覧から詳細を確認して下さい」

急に脳内で合成音が響き、目の前にポツアップウィンドウが表示され、文字が躍る。

「なんだ。もう受理していると思つてたんだが、随分と遅かつたな」  
大抵始まりの地はバックストーリー由来の地であり、最初のチュートリアル的なクエストはメインストーリーでもある。

さてはて、俺の過去はどうなつているのか。多少の興味と、これから待ち受ける第二世代と目される世界への興奮が俺を包み込む。<sup>モカン下</sup>  
思考でメニューと強く意識すれば、そのプレイヤーにしか視認出来ない物理干渉の出来るホログラムメニューが出現する。

「と、これが」

メニューにある一覧の一つ、クエスト。それに指を走らせると画

面の内容が切り替わり、現在受けているクエストが表示される。

クエストには四種類あって、一つは言わずもなからの“メインクエスト”。二つ目が“サブクエスト”。三つ目が“スペシャルクエスト”。最後に“ワールドクエスト”だ。

一つ目の説明は今更だろう。二つ目のサブクエストは基本的にはメイン以外のクエストと言ってもいい。

NPCから受けるクエストの大半はサブクエストになる。と言うか、スペシャルとワールド以外全て、と言った方がいいたるうか。そしてスペシャルクエストは名の通り、少し特殊なクエが多い。言わばレアクエストとかと言う区分だ。

内容も難しかったり、特殊だったり、受注条件も様々だが、総じて報酬が破格なクエストとしてテストでは有名だった。

最後は世界と付く通り、不特定多数の参加が可能な超大型クエストを指す。一般的には運営から出されるのだが、今回は統括AIが結構な頻度で出すと言われている。

なんせ小型アップデートは告知無しで統括AIが管理するのだが、ワールドクエストもその範疇に含まれている。

ワールドクエストも報酬が場合によっては破格であり、下手をすればバランスブレイカー級の品が出る場合も多い。

と言ってもレベル上限解放などであっさり過去の遺物になる事も多いのだが……

「今回の俺は“記憶が無い”のか。と言っても、場を見ればなんとなく出身の予想は出来るレベルだが」

メインクエスト一覧に表示された“リビングデット動く死体”。その内容は以下。

「メインクエスト：リビングデット動く死体」

内容：気づけば屋敷の一室で倒れていた君。訳も分からず部屋を探索するが見つかったのは、明らかに致死量の血液溜り。赤黒く変色したそれは、恐らくは君から流れ出たものだ。

その事実には驚愕するものの、君は生きている。不思議に思い思わず心臓に手を当てて更に驚く。なんせ“鼓動”が聞こえない。そう、君はアンデットとして有名な、彷徨う亡者の仲間、動く死体リビングデットになっていたのだ！！

更に驚愕の事実。君は過去の記憶を失ってしまった！！

誰も居ない屋敷。一人だけ闇の住人となってしまった君。その真相を探らねばならない。そう決意を君は一人誓う。

さあ、まずは屋敷を出よう。君は失った記憶と、これからどうするのかを考えなければいけない！！

クリア条件：屋敷の外へと出る（一／〇）

報酬：初心者装備セット

微妙に漂うチープな香りは昔から続くMMOのクエストの説明による伝統と、そう言ってもいいのではなからうか。それでもこのアウトワールドはマシな方なんだが。

とにかく、これを見るにバックストーリーを知るにはメインクエストをこなしていくしかないようだ。

これは少し特殊なケースと言えた。なんせ、大半がメニューの“バックストーリー”から己の物語を見る事が出来る。

それが俺の場合、その項目が灰色になっていて選択できない。噂ならテストでも聞いていたが、まさか自分がその境遇に陥るとは思っていなかった。

これが見れないからと言って、ゲーム進行にはなんら影響がないのは幸いだらう。すっかり治まった貧血、そして鼓動しない心臓。

まあ、無駄なところまで忠実に再現しているのがこのゲームの良

い所だし、俺は好きだ。

「さつてと。それじゃあ行きますか。つと、そう言えば今回のロールプレイ忘れてたな」

クールでホット。そして戦隊バリの熱血。なんとも言えない要素だが、実践するしかない。それがマイルールなのだから。

瞳を閉じ、今はデータで構成された己の自己を深く見つめる。何度も何度も己に言い聞かせる。刷り込みにも似た暗示。それが俺のちよつとした才能。

カチリと、まるでスイッチの入ったような音が聞こえた気がした

……

「よし。世界は舞台。俺と言う役者を引き立てる為にある。精々遊びつくしてやるさ。一先ずは屋敷を出ないとな」

暗示の効果か、不思議と熱くなる思いに従い俺は部屋を飛び出した。

## 第五話 チュートリアル その一（後書き）

後書き

質問などがあつたら積極的にどうぞ。先で説明予定の場合は答えられない場合もあります。

コンセプトのオンラインゲームがやりたくなる。を頑張ってみようと思います。

少しでもプレイしたくなつたら作者の勝ちなんですッ（キリ

と、訳分らないことは置いといて、感想評価、誤字脱字の報告などお待ちしております。

## 第六話 チュートリアル その二

高揚感。恐らくは設定上とは言え、人外になつた影響。そして胸に宿る熱き思い。これは暗示による効果。

その二つを抱え、予想より随分と広い屋敷を駆け抜け数分。ようやく巨大なホールの正面にあつた、真鍮製らしき両開きの扉を発見し、それを押し開く。

ギギギイイ　と、幾分錆付いた音を響かせ世界への門が開く。窓から既に外の景色は確認している。最後にガコンツ！と重々しい音と共に完全に扉が両端に固定され、遂に外の世界へと辿り着く。

「クエストを達成しました。該当クエストを確認して下さい」

再び響く女性らしき合成音声。そして宙をコミカルに踊るポップアップウィンドウ。今も感じる風の感触、音、周囲から漂う緑の匂い。空の彼方で瞬く夜の星々。虫の鳴き声……

オープン時より一段とリアル性を増したようにすら思える光景だと言つのに、上記のウィンドウはそれらを見事にぶち壊し、この世界がゲームの中だと思ひ知らせてくれる。

（まつ、それでもなきゃ、ここを本当に現実だと勘違いしてしまう阿呆も出そうだからな）

事実、一時仮想世界のリアル度が問題になつた事があるのだが、そもそも電脳化時にかなり危ない内容も同意している為、一定レベル以上の現実性《リアル度》を持つ仮想へのアクセスは同意ウィンドウが出るようになってる。

このゲームの場合、公式での同意と、アクセスコード購入の二点

で確認しており、それらに同意したのなら何が起きてても自己責任。  
流石に明らかに運営、ひいては統括AIに責がある場合は別だが、  
基本的には一切の責を運営会社は負わない。

電脳化がかなり普及している今、それらは一般的な常識として浸透している。

「クエスト完了っ」と

クエスト一覧からクリアしたメインストーリーを選び、完了と書かれたリンクを素早くクリック。アバターの周囲を幻想的な光の乱舞が覆い、ウィンドウにクリア祝福の文字が現れる。

報酬がインベントリ アイテムなどが仕舞われている道具袋に追加された事が記述され、新たなメインストーリーが発生。

先に初心者装備セットをメニューのインベントリから選択して使用。ウィンドウに防具と装備一式ずつ選ぶ項目が出現する。

「今回はどうも“肉体一筋”で行きたい気分だし。ここはやはり“拳”か？」

前はオーソドックスに片手剣に盾。これが前の戦闘スタイルで、大部分を防御に費やし、残りを攻撃や命中に当てていた前衛防御型だった。

MMOでの俺のスタイルは火力 ダメージを効率的に与えていくスタイル か壁 前衛でモンスターのターゲットなどを維持し、味方を守るスタイル である。

火力の場合も前衛火力。ようは戦士系ばかりで、どうも前線で肉体を使った戦闘の方が俺には性に合っているらしい。

「選んだ装備は初心者者の皮鎧。初心者者のブーツ。初心者者の拳か。ついでにレポーション（小）五個も入ってたな。早速装備してしまお

う」

他にも色々あったが、この三つを選んだ。実際最初の装備もあって、余程変な装備を選ばない限りは問題ないだろう。

メニューを呼び出し、装備覧から入手した装備を別ウィンドウのインベントリから選びドロップしていく。

衣服が光子の群れとなり溶けるように消え、拡散するまえにまた集合。僅か一秒程度で皮の鎧、同じ皮製の編み上げブーツ。そして皮製の手袋となる。

今まで来ていた衣服。貴族的だったソレはアイテム覧に表示されることもなく消えた。言わば一時の仮装備だったと言うところだろう。

「やっぱ皮鎧で正解だな。前は鉄鎧を選んだが、動きにくくて大変だった……」

軽く肉体を動かし、分身体アバターの感覚を馴染ませていく。よく急に歩き出してこける者が居るが、よく考えれば当たり前前の事だ。

なんせ今までは違つ肉体を使うのである、当然重心やら力の入れ具合が違う。結果覚束ない赤子のように転んでしまう。

VRMMOをプレイする際の一種の通過儀礼と言われる、イベント扱いにすらなっている現象だ。そしてそれは現実と肉体の差異を大きくすればするほど顕著となる。

だからこそあまり弄らないように俺はしているのだが。それでも僅かな違和感をこうして軽く肉体を動かす事で馴染ませていく。

本来ならこんなに早く馴染むことはありえない。そこは全てデータの世界、アバター作成時にある程度の補助をデータとして受けている。

具体的にはアバターの肉体も自分の肉体だと、そう言う情報が無

意識下に刻まれるらしい。俺もその辺は門外漢の為詳しい事は分からない。

「こんなところか」

十分ちよい肉体運動を屋敷の前で行い、違和感がほぼ無くなったところで止める。ついでに肉体の運動性能も大体把握した。

精々高校一年か二年のレベルだろうか。現実の俺にさえ適わない。最初から成人レベルだと後半とんでもない事になるので、当たり前処置かもしれないが、現実にさえ劣ると言うのはやはりもの悲しい。

それでもレベルや装備を整えていった中盤以降の現実ではありえない万能感。超絶的な能力が齎す快楽は想像を絶するものがある。VRMMOをプレイするプレイヤーの何割かはそれが目的だと、そう言ってもいいくらいだ。

「さあて。次のクエストの内容はつと」

「メインクエスト：動く死体<sup>リビングデット</sup>」

内容：君は無事に屋敷の外へと出る事が出来た。道中屋敷には誰にも合わなかったことから、恐らくは何か起きたのだと君は推測する。

途中持ち出した装備がある筈だ、装備していないのならするとい。メニューの装備欄にインベントリの装備をクリック&ドロップで装備出来るぞ。

君が準備を整えていると何処からか獣の遠吠えが聞こえてくる。段々と近づいてくる足跡……不味いッ！ どうやらこれは野生の狼の足音だッ！ 屋敷から漏れ出す血の臭いに誘われたに違いない！！

このままでは君は狼に無残にも食い散らかされるだろう。記憶を失う前、君は戦闘を幾度もこなしてきた筈だ。恐れず立ち向かえ！君は記憶と真実を取り戻す為、こんなところで立ち止まってなどいられないのだから！！

クリア条件：野生の狼の討伐〔三ノ〇〕

報酬：経験値五十・記憶の欠片

ページの下部にある読了を押すとのと同時、どこからか不気味な遠吠えが響いた。闇夜を照らす月光の光。それは同時に屋敷と周囲の深い森を照らしている。

群雲が空を覆い、星が瞬く幻想的な世界で俺は緊張感を高めている。何せ初の戦闘。言わば俺にとってのデビュー戦。高鳴る心臓

は停止しているが、熱く迸るパッションは本物だ！

きつと鏡を見れば笑みを浮かべているに違いない。近づく遠吠え、この近さならもう森からいつ飛び出しても可笑しくない。

思考だけでメニューを表示、同じく思考選択でスキル一覧を確認。そこに全職業使用可能な、放浪者スキルを確認し即座にショートカットに登録。これで思考内か、スキル名を口にするだけで使用が出来る。

「さあ、来いよッ！俺のデビュー戦の為に華麗に散ってくれ！」

声に反応したのか、遠吠えが止み。一瞬の静寂が場を満たす。程よい緊張感が漂う中、ガサリ！と前方の茂みが揺れるのと同様、俺は拳を構えて走り出した。

同時に姿を現したのは三頭の中型犬程の大きさを有する灰色の狼。所々汚れが目立つのが生々しい。

こんな奴らに時間をかける気などない。なんせ、まだゲームは始

まっ  
たば  
かり  
なの  
だか  
ら……  
……

## 第六話 チュートリアル その二（後書き）

後書き

今回は初の戦闘シーン。戦闘シーンは苦手なので、お見苦しいものになるかもしれませんが、まあ作者なりに頑張ってみようと思います。

と言っても、そんなに文字数はとらないと思いますが。

お気に入りや評価、感想をくれた方々には感謝の念が絶えません。現金な作者なものですから、やはりそれらは嬉しいものです。

次回でチュートリアル編は終了します。ここまで目を通して下さり有り難う御座います。

## 第七話 チュートリアル了

走る速度も現実以下だが問題ない。口元から涎を垂らし、その闇色の瞳を不気味に輝かせた三頭の狼が哀れな獲物に向かって瞬く間に距離を詰めていく。

思考なんてあるのならば、きっと飛んで火に居るなんとやらとでも思っているのだろう。

お生憎様だ。三頭も居るのにバラけて動かない事から、オープンベータ時と基本的な動きは変わっていないと確信する。

数秒もしない内に拳の射程距離に狼が踏み込んだ。それは同時に相手の牙と爪が届く距離をも意味する。

「しゃらくさいッ!!」

唾液を撒き散らし、その薄汚れた牙で飛び掛ってきた一頭の一撃を上半身を捻って回避。同じ行動に出た二頭、三頭と全員の攻撃を避ける。

「今度はこちらの番だッ!」

三頭目がこちらを振り向くより早く。一步を深く踏み出す。砂埃すら巻き上げる勢いそのままに全身を捻り、バネの反動のように肉体を振り回す。

遠心力の加わった強力な回し蹴り。更に初期スキル“強撃”を重ねる事で威力を底上げ。丁度反転したばかりの三頭目の狼。その顎に見事に強烈な蹴りが食い込んだ。

「ッ!」

味方が本来の一撃ならありえない吹き飛ばすと言った状態を受けたにも関わらず、我武者羅に爪と牙を振り回してきた一頭の一撃をバツクステップで回避するが、二頭目の爪が脇腹を掠めていく。

ジクリと、鈍い痛みが全身を駆け抜けた。浅い一撃だったが、感覚的に一割程のライフが削られたと理解する。

痛みと言っても指を軽くぶつけた程度のもの。怯まず再度地面を蹴り、飛び掛ってきた一頭の攻撃をカウタンナーで迎え撃つ。

「ハッ！ これでも食いなっ！！」

強烈な横殴りの拳。クールタイム スキルを使用すると、そのスキルは決められた時間際再使用出来ない。それをクールタイム。冷却時間と呼ぶ を回復させた“強撃”を乗せた一撃。

相手の飛び掛る勢いをも巻き込んでその横つ面に拳が突き刺さった。ガッ！ と、鈍い音と拳に走る僅かな衝撃が手応えを物語る。

『ギャッ、ギャインツ！？』

物理攻撃時のダメージ。それに更に二十六パーセントのダメージを上乗せするスキル強撃。チュートリアルで出現する相手くらいなら、一撃死も十分あり得る。

「つと、危ない」

上手く一撃が決まり、思わず余韻に浸りかけた瞬間片方が飛び掛ってきた。横に身を移動し回避し、更に戻ってきた一頭目の鋭い爪を避け、その腹に蹴りを叩き込む。

現実を模した世界であるここでは、身長すらもリーチ差を生み出す武器となりえる。少なくとも肉体系を用いることにした俺には重要な要素だ。

強撃のクールタイムは五秒。既に回復している。蹴りに乗せて発動した強撃はその性能を余さず発揮。宙に一瞬浮かび、そのまま地面に熱いベーズをかました一頭がピクリとも動かなくなった。それを確認すると同時に、こちらにむかって牙を向けて踊りかかってきた一頭。その一撃に合わせるように拳を振り下ろす。

『キヤインツ!?!』

苦痛の声を上げ頭部に叩き込んだ拳の一撃により崩れ落ちる一頭。そのまま動かなくなった瞬間、右足に鈍痛が走りぬけた。

痛みは軽度。それでもミシリと嫌な音が脳裏に響く。

「ツツ」

慌てて見れば太ももに最初に吹き飛ばした一頭が食らい付いていた。先程より幾分増した痛み。最大でも打撲程度の痛みだが、それでも中々に痛い。

だが相手から動きを放棄したのならばそれはチャンス。クールタイムが回復した強撃を乗せた踵落としをその背に振り下ろす。

高校生程度とは言え、スキルで強化され、なおかつ本気の一撃は容易くその脊髄に致命的なダメージを与える。

その身に走っただろう衝撃に口が開き、牙が太ももから抜け落ちる。そこに駄目押しにと、落とし足とは逆の足で回し蹴りを放つ。本来なら練習が必要な動作も、長年のVRMMORPGの経験が補ってくれる。

その頭に吸い込まれるかのように蹴りが食い込み、一瞬で数メートルの距離を吹き飛ばす。確実に倒したと言う感覚を感じたが、その通りに最後の二頭も地面に倒れ動かなくなった。

「ふう……」

残心と言う訳ではないが。念のために油断なく周囲を警戒し、連戦はないようだと思堵する。メニューからステータスを開き、そこに記されたHPバーが三割程減少しているのを確認。

POT ポーション を一本惜しみなく使うことにする。インベントリから目的のアイテムを選ぶと手元で光子を無数に煌かせ、一瞬で試験管のようなものが手の平に具現化された。

コルクのようなもので口が締められたそれを抜き、中の赤い液体を一気に飲み下す。

「テストから思ってたが、この味はどうかならないのか……」

ハッキリ言って不味い。ケミカルな味だ。訳が分からないかもしれないが、そうとしか言えない。幸い量は一口程度なのが救いだらう。それでも好んで飲みたいとは思わない。

良薬は口に苦しを体言したようなアイテムだが、これのせいでPOTを積極的に使おうと言う者は確実に減っている。テスト時にはその煽りでヒーラー 回復能力の高いプレイヤー の価値が相対的に上がっていたと思いつく。

まあ、そもそもPOT自体にもクールタイムが一分程設定されているが……どうも味の修正はされなかったようだ。まったく持つて無駄な拘りとしか言えない。

「クエストを達成しました。該当クエストを確認して下さい」

POTに関してのちょっとした内容を思い出していると、クエスト達成のアナウンスが直接脳に響く。

早速メニューを呼び出しクエスト欄からリビングデットを選び完了させる。淡い青や赤などの光の乱舞がエフェクトとして肉体を包み。

更に

「レベルが上昇しました。ステータスより各ポイントを割り振って下さい」

と合成音が鳴り響きレベルアップを告げる。ポイントって言うのはステータスに割り振るポイントと、スキルに割り振るスキルポイント　SP　の二つの事だ。

他にも隠し要素として“熟練度”が存在するが。こっちは基本的にプレイヤー側から確認する事は出来ない。

熟練度の限度はお陰で判明していないが、少なくとも上昇量に見合った恩恵があるとテストで確認されている。

とりあえず先にクエストの確認をしまおう。クエストの完了と同時に次のメインクエストが発生している。

「メインクエスト：動く死体三」リヒングデット

内容：襲い掛かる狼達。それを必死で迎え撃つ君は、不思議と肉体が知らないはずの動きをなぞるのを感じる。それは過去。記憶を失う前の君が得意としていた戦闘方法だ。

そして全ての狼を無事に撃退した君は、同時に僅かな記憶の欠片を取り戻す。

それは雨が降る夜。屋敷では主人の生誕日を祝っていた。シャンデリアが煌き、給仕が慌しくも活気的に走り回る。招かれた婦人が扇で口元を隠しながら優雅に笑う。

潇洒な衣装に身を包んだ紳士が商談に花を咲かせる。君は無論そんな中心で多くの祝辞を貰っていた。

美味しい料理。楽団の荘厳な音楽。最近その美声で有名となった女

性の歌。幸せをより大きく積み上げたかのように充実した光景。

素晴らしきかな。全ては君の努力が成した結果。胸を張って誇れる事だ。そう、その日までは……

誰かが悲鳴を上げた。屋敷のホールの硝子が砕け散り、外から雨風が屋内に吹き付ける。

誰もが恐慌に陥る中で、更に多くの者が生唾を飲み込み背筋に冷や汗を浮かべた。

#### 侵入者。

誰かが呟いた。砕け散った窓硝子に映る人影。まるで重力を無視するかのよう、二階程の高さのある窓から床に降り立つ。

外は激しい雨だと言つのに、その場の誰よりも優美なドレスには一切の雫すら付着していない。

ゴロゴロと雷が鳴り響き、カツ！ と青白い光が屋敷を包み込んだ。瞬間、全員が目視する。同時に忍び寄るは絶対的な恐怖。死をも招きかねない圧倒的恐怖だ。

#### 吸血鬼。

誰かが再び囁いた。高位の化け物。人ならざる者としてはあまりに有名で、そして絶望的な存在。一瞬映った、その少女と称して良い顔は狂気の色すら隠さず笑みを浮かべていた。

人ならありえない真紅に輝く瞳。それは魔の者だけが持ちえる色だ。笑みから覗くは鋭い犬歯。薄紅色の唇は紅を差したようにも、血を塗りたくったかのようにも見える。

気づけば誰もが血溜まりの中。息せぬ骸と成り果てていた。護衛として場に居た多くの傭兵も、羽虫を叩き落すかのように呆気なく命を散らす。

君はあまりの恐怖に逃げ出し、そして自室に辿り着いた所で背後に気配を感じ振り返った瞬間、口元と言わず、全身を血で染め上げた少女の顔が目映る。

何かを口にするより早く、そのぬらぬらと、赤とピンクに蠢く淫靡な口内が限界まで広げられ、君の首筋に噛み付く。振り払おうとするも、抱きしめられるように腕を回され、圧倒的膂力で背骨が砕かれた。

吸血に伴う圧倒的快楽を感じながら君の意識は暗闇へと転がり込んでいく……

君は思い出した記憶の欠片に脳が沸騰したかのような怒りを覚える。皆、皆あの吸血鬼に殺されてしまったのだ。友人も、妻も、息子も。全て奪われてしまった。

何と言う理不尽。何と言う無情。決意する。あの吸血鬼を追い詰め、無残な方法で殺してやるのだと！

だがそれには君はあまりに無力だった。力を蓄えないといけない。何より吸血鬼の行方を追わねばならないだろう。

さあ、ここから一番近い街。世に旅立つ為の“始まりの街”へと向かえ！！

クリア条件：始まりの街に到着する

報酬：経験値五十 SP上昇薬

読了を押し出すの同時。目の前に青く渦巻くゲートが出現する。見た目は小型のブラックホール見たいたが、長距離移動の為の転送ポイントだ。

黄金時代の超科学の遺産らしいこれは、世界各地に存在している。と言う設定だ。このアウターワールドオンラインはアクセスコード購入のとき、“全年齢”“十五歳以上”“十八歳以上”“二十歳以上”の四つからコード区分を選ぶ。

言わばどれだけ暴力的なグラフィックが適用されるか、あるいは

卑猥な表現が適用されるかの目安だ。この際に「ニューロジャック」擬似神経子を通し、年齢情報が自動でやり取りされるので年齢詐称は出来ない。

俺が選んだのは二十歳以上。暴力表現も、エロイ方もバッチリグラフィックに適用されている。お陰でこのようなバックストーリーが出来上がったのだらう。

「よしつ。まずは街で一息つくとするか。一体どれだけのプレイヤーが既に集まってるか楽しみだ」

始まりの街。実際には幾つか同じ存在があり、人数の状況で自動でゲート使用時に割り振られるが、それでもメニューから何番の街か確認は出来るから、どれだけプレイヤーがその街に居るかは目安として分かる。

迷う事無く足をゲートに向けて進めていくと、周囲が捻じ曲がっていく。ゲートの作用で景色が歪んでいるのだらう。同時に一瞬の暗転と、浮遊感が身を包んだ……………

## 第八話 ステータスは計画的に！

タンツと、軽やかな音が響く。俺の履いている靴が石畳と衝突した音だ。暗転した視界は即座に色を取り戻し、周囲は僅か数秒の転移で変化していた。

ゲートから転移される際に働いた力に従うように数歩進みながら、この始まりの街を見渡す。公式の設定では人口千強。始まりと言いながらそれなりの規模と言える。

街唯一の南門。そこから続くメインストリート。中央にある大きな広場。円を基準とした裏路地。街を抱え込む高い石の塀。文化水準はありがちな中世と近代の混成レベル。

それが始まりの街の大まかな説明だろうか。

「思ったよりはプレイヤーも居るみたいだな……」

メニューからこの街が一つ目のサーバーだと分かるが、収容数の五割は居るかもしれない。南門からは幅の広い、数メートル程ある大通りが続いているが、チラホラと“似たような”装備をしている者達が居る。

中盤に入ると、その装備の多岐性もありNPCと一見では見分けが付かなくなるが、今は誰もが初心者装備シリーズなのだろう、共通点が多く、簡単にプレイヤーだと知れた。

「クエストを達成しました。該当クエストを確認して下さい」

大通りを真っ直ぐ進むように歩いていると、アナウンスが響く。一度立ち止まり通路の端に移動し、民家だと思われる煉瓦造りの家に背を預けクエストを開いた。

「メインクエスト：動く肢体三」<sup>リビングクエスト</sup>

内容：君は理不尽な記憶と、力無き己。逃げ出した自分に激しい怒りを感じながらも始まりの街へとやってきた。ここは多くの“探索者”<sup>カ</sup>や“放浪者”<sup>ストレンジャー</sup>志望が集まる、まさに始まりの地と言えよう。

君はこの街でまず失った戦闘の勘を取り戻しつつ腕を磨き、多くの情報を得なければいけない。

多くの初心者が集うために、簡単な“依頼”<sup>クエスト</sup>も多く存在している。直接街の人と交渉するのでも、依頼<sup>ギルド</sup>幹旋組織で依頼<sup>クエスト</sup>を見繕うのもいいだろう。

多くの経験を積み、逸早く力を身に付ける！

文面の変化している内容を読み、読了を押せば既に数度目になる光のエフェクト。報酬のアイテムがインベントリに収納される。

どうやら今回は次のメインクエストは発生しないらしく、合成音声は響かない。メインクエストの発生条件は複雑だ。レベルだったり、魔物の討伐数だったり、あるいはクエストをこなした回数の場合もある。

一個人でも達成出来る内容が殆どだが、稀に更に面倒な条件が課されている場合もあると言う。俺の時にそんな複雑な条件が重なっていない事を祈っておく。

さて、歩き出すか……そう思っただけで足を前に向けた途端、『ゲキユルル』と奇妙な音が耳に届いた。はて、なんだろう？

不思議に思い周りを見渡すも、見えるのは歩くNPCにPCばかり。音の発生源になりそうなものはない。

『ゲキユルル』と再び鳴り響いた事で、ようやくそれが俺の腹からなっているのだと気づく。

「そうだな。まずは腹ごしらえするか」

このゲーム。しっかりと空腹を感じるようになっていく。生理現象は何故か起きない。これは局部の再現が年齢制限に引っかかる癖に、十八禁からグラフィックに適用してもデメリットしかプレイヤーに齎さないかららしい。

他にも生理現象としての睡眠も必要ない。バットステータス。状態異常としての睡眠なら存在はする。

そして空腹は放って置くとステータスの一時的弱体化すら招く、結構厄介な状態異常扱いだ。

「ん？ こんな店、テスト時にあったか？」

大通りの端を歩きつつ、手ごろな店を探していると。どこにでもある脇道、その少し先に古びた看板が置いてあるカフェらしき店を発見。

まるで隠れるように目に付きにくい。わざとそうしたのだと言わんばかりの配置。

テスト時には見た覚えのないその店に興味が沸き、気づけば自然と足はその入り口を潜っていた。

「好きな席に座りな」

薄暗い店内の奥。カウンターの内側でグラスを磨いていた年の頃四十代過ぎのナイスミドルが、ぶっきらぼうに視線と言葉だけ投げかけてきた。

それに従い黙って入り口から左端の背もたれのない、カウンター隣接の椅子に腰を下ろす。

「注文は？」

「初めて来るんだが。何かあるか分からない。申し訳ないが何か適当に任せても構わないか？」

俺の言葉に黙って頷き、奥。恐らくは厨房に消えていく渋い、将来なるならあんな顔立ちが良いと思わせるナイスミドル。

看板は随分と薄汚れていたが、店内は清掃が行き届き、雰囲気こそ薄暗く陰のイメージが強いが悪くはない。

そう広くない店内には二、三名のNPCらしき人達がテーブル付きの椅子に座っている。料理が来るまで時間はまだあるだろうと、ステータスを開き、そこからポイントを割り当てていく。

アウターワールドで存在する。数値化されている基本的ステータスは全部で“STR”“VIT”“INT”“MID”“DEX”“AGI”の六つだ。他に隠しステータスで魅力値、運、熟練度などがある。一つ目の効果は憶測の面が強く、NPCやPCの受ける印象に関わってくるんじゃないかと言われている。

運はそのままだ。様々な要素に絡んでくるが、代表的なのはドロップ率だろうか。熟練度も謎が多いが、スキルや装備にも設けられているのは確実だ。

STR、ストレンクスは攻撃力に。VIT、バイタリティはHPの総量や物理防御力。INT、インテリジェンスは魔法攻撃力。MID、マインドは魔法防御力やMPの総量に。DEX、デクステリティは貫通率。AGI、アジリティは貫通防御率、反射神経などにそれぞれ影響を及ぼす。

百年程昔は、DEXにはクリティカルや命中、AGIにはクリティカル防御や回避などの効果があったらしいが、肉体を用いるVRでは意味を持たない。

クリティカル自体は意味は違うが、比較的弱点部位を攻撃すれば似た効果を得られる。貫通率はどこを攻撃しても発生し、一定の計算値で相手の防御力をその一撃のみカットしてダメージを与える。昔程DEXの重要性は薄れたが、火力UPには繋がるので、火力職なら意識しておいて損のないステータスだろう。

「課金でステータス再振りチケットは購入出来るし、案外適当でいいんだが。どうしたものか……」

一レベルで貰えるステータスポイントは十。因みに初期値は全ての値が十となっている。ここからどう割り振っていくかでそのキャラのスタイルが決まっていく。

無論。今回の俺は前衛でしかも盾職として活動するつもりだ。一回たりとも味方に攻撃を通さないと言うのは、男なら懂れてしかるべきだろう？

仲間内で頼られたり。知らない人とのパーティでその腕を褒められた時などは、火力職で魔物を一層するよりもなお気持ちがいい。

最前衛で魔物の一撃を受けながら、常にギリギリの攻防を繰り広げる盾職。特にVRMMOは視覚的、触覚的にも迫力があり緊張感が半端じゃないのだ。

と言つて、じゃあガチガチの防御型がいいのか？ と言われれば首を捻る事になる。スキルの中にはヘイト 敵意とも呼び、魔物から狙われる要素を総称してそう呼ぶ を増加させる物が前衛にはあるが、これは半分以上が攻撃力依存だったりする。

範囲攻撃スキルにヘイト増加効果を持つものの中にはあるだろうし。ある程度の攻撃能力がないと敵の攻撃を全て引き付けるのが難

しくなる。

無論、攻撃力によらない強力なヘイト増加スキルもあるにはあるが。数は少なく、クールタイムは長い。

攻撃能力も確保し、防御能力も特化に劣らない。これこそ理想だが、中々に難しいと言えた。VRMMOの中には両立が不可能な場合も多く、アウターでも結構微妙である。

だが可能性が無いわけではない。何せ正式稼動と同時に解放されたシステムの中には、“スキル融合”がある。名前の通り、二つのスキルを組み合わせ、新たなスキルを生み出すシステムだ。

今は灰色となり指定できないので、何か前提条件があるのかもされない。これを利用すれば強力なヘイトスキルや、防御スキルが獲得出来る可能性もある。

また、それ以前にソロも考えると攻撃能力がないとレベル上げがダルイと言う最大の理由も存在した。

「やはりある程度STRにも振るしかないか？」

俺は目の前に置かれた湯気を立てる料理にも気づかず。ああでもないこうでもないかと、一人百面相を披露しつつ悩み続けた……………

## 第八話 ステータスは計画的に！（後書き）

後書き

現在設定としてスキルツリーを作るか悩んでいるところ。でも面倒

……

チラツと出した通り、課金あります。むしろ他の作者様の作品見ていると、あまりみないので不思議に思ってしまうくらいです。採算的にも無いと難しいと思いますしね。

## 第九話 パーティーを募集しよう！

「何時でも来るといい。今は無理でも、鍛錬を積みばお前に任せてもいいかもしれない」

ステータスを振り終わり、ついでにスキルも取得。メニューの課金ショップからアイテムを購入した後。出されていた Pasta。恐らくはボンゴレの亜種と思わしきものを胃に詰め込み、三十銅貨支払い店を出ると、俺の背に店主の声が届く。

慌てて振り替えるが既に扉は閉まった後。思わず僅かに前に垂れている髪を全て後ろに掻き流し、ガシガシと頭を掻いてしまう。

「まさか裏クエの店だったのか？」

裏クエ。クエストは大抵クリアすると報酬とは別に、“名声”と呼ばれる値が増えていく。これには表と裏の二種類があるんだが、裏。

言わば薄暗い汚い闇の世界の名声。それを上げる為のクエストは通常では先ず受けられない。その理由が先程の店だ。

テストでも中盤で判明した事実なのだが、あの店、始まりの街にしか存在しない。そして一定のレベル以上で訪れる事でイベントが発生。

それによって裏クエと通常呼ばれている、裏の名声を上げるクエストが受注できるようになるって訳だ。

「まっいいか。確か十レベが条件だった筈だし、次に来るときにそのレベルになっていればいい」

そう俺は結論し溜息を零す。なんせ、店主はもとより“場所”も

内装も変わっていたのだ。驚かない方が可笑しいだろう。きつと裏クエを知っている者なら店を探す筈だが、元の場所にはないだろうから驚くに違いない。

と言つても。この情報をネットに流すつもりはなかった。今の時代、貴重な情報は秘匿するのは基本。かなり昔にあった、攻略サイトなどは廃れて等しかった筈。

完全にその手のサイトが無いわけではないが、それらは大抵電腦用であり。しかもアクセスコードを知らないと出入り出来ないような、一見様お断りの仕様である。

それすらも情報量的には昔より数段劣るものであり。基本情報は己の足で探すのが当たり前。だからこそ、VRMMOでは情報は価値が高い。それだけでレアなアイテムと交換できてしまうくらいにだ。

「だからこそ。俺も情報を無料で公開するつもりはないんだがな……」

テストでの情報。その基本は既に公にされているが、それでも特殊なものなどは未だ一般には漏れていない。

その多くを俺は握っているつもりだが。百パーセントではないだろう。レア中のレア。最高レベルの情報の多くは未だ個人の手の中と考えるのが妥当。

尤も。情報の大半は俺の手によるものではなく、テスト時における“仲間”達の活躍が大きいのだが

「さつて。腹も満たしたはいいが、お陰で懐は寒い。どうするかな」

支払った銅貨三十枚は今の俺では決して安くない。表記では三十B。Bはブロンズ。その銅貨が五十枚でシルバーのS。そして更に五十枚でゴールドのG。

ありがちな設定だが一応理由がある。最初の超文明である黄金時代からGを。次の超文明である白銀時代からSを、そして現在の残滓が残る青銅の時代からBと、それぞれ取られているとのこと。

銅貨は俺の見立てでは一枚二十円弱。そして初期で所持している持ち金はなんと一S。つまり、残りの残金二十B。四百円ばかりと言っ無残な状態だ。

正直、店のパスタはかなり高額だった。ゲーム内での平均なら恐らく同じものでも十五銅貨で買えた。店を見つけたのは幸運だが、財布には重い一撃を見舞ってくれたものである。まあ、美味かったが……

「となるとレベル上げは無論。資金稼ぎもしなきゃいけないな」

そうなると取れる選択肢は多くない。RMT リアルマネートレードと言い、現実の金でゲーム内の金やアイテムを購入 しようにも、未だ始まったばかりでそれも無理だ。

となると地道に魔物を狩って、落とす金かドロップ品を捌くか、だが……第三の選択肢がまだある。それこそ効率的には一番いいだろうと言える、“重複クエスト”。

重複クエストは、通常のクエストとは違い、何度でも受けられる特性がある。名声などはその分低いし、報酬も大抵金や経験値だけだが、これはソロでもパーティでも効率として段違い。

これを受けず魔物を狩る奴は正直MMOを知らないだろう。非効率に過ぎると言っいい。まあ、経験値だけなら、パーティで格上を狩る方法もあるのだが、野良だと連携の関係でキツイし、それなら重複の方が妥当と言えた。

重複なら資金も名声も稼げるし。後々の苦労が軽減出来るのも嬉しい。名声値が低いと受けられないクエストも多く、稼げる時に稼いでおくのが鉄則だ。

「となると善は急げだな」

店から歩き、五分ちよい。中央広場の一角に辿り着くと、俺はそのまま円の端に一定間隔で置かれたベンチに腰掛ける。

そのままメニューを開き“チャット”と言う項目を選択。すると音声チャット、文字チャット。専用のチャットルーム等が項目に現れる。

その中から文字チャットを選択。そうすると一つのウィンドウが目の前で物質化する。次々と変化していく画面をよく見れば、それがプレイヤーが発信した言葉だと分かるだろう。

「やつは募集系は殆どまだ居ないか……自分で募集主やるしかないな」

ウィンドウ左下の小さな長方形の枠。“全チャット”と表示されているのを確認し、その横にある枠をタッチ。するとウィンドウが真下に拡張され、その部分がキーボード化する。

音声チャットなら口に出した言葉がそのまま文字に変換され楽なのだが、たまに妙な変換ミスが出るので、未だなぜかこの古典的なやりとりは根強い勢力を誇っていた。

「まあ。レベル十までは一次職に就けないし。枠は適当でいいよな」

カタカタツと。実際は音なんてないが、そんな気持ちでキーボードを打ち込んでいく。傍から見れば、きっと宙で可笑しな動作をする変態とでも見えるかもしれない。

考えてちよつと口元が引き攣るが。流石にこの手のゲームに参加しているプレイヤーなら察してくれるだろうと、そう思っておく。

打ち込んだ文章を確認し、問題ないのを見てエンターキーを押す  
込む。

シャノン：こちらレベル一、職放浪者<sup>ストレンジャー</sup>。重複クエレベル上げPT募  
集中、@四。レベル差五以内であれば誰でも歓迎。囁き待ってます。

と言う文がウィンドウを流れる。後はのんびり参加者から囁き。  
または笹、WISなどと呼ばれる、対象だけに直接チャットを送る  
囁きを待つだけだ。

ふと。空をぼーっと眺めていると。森での時刻と今の時刻が違  
う事に気づく。森では夜だった筈なのだが、どうみても今は真昼頃。  
空は青々とし、僅かな薄い雲がゆっくりと移動していつている。  
特殊なフィールドでは時間が狂っている場合があると聞かすが、もし  
かしたらあそこもその類かもしれない。

「んっ？」

フェアリー：もしもし。聞こえてますか？ ハロハロ！ メイデ  
ーメイデー！？ シャノンさんですよ？ そうですよ。と言っ  
か間違いないし。

俺は何も見ていない。別にテスト時の知り合いで、妖精<sup>フェアリー</sup>なんて自  
称する奴なんて知らない。

「いい天気だ……睡眠欲求があれば眠たくなる日和だな」

フェアリー：あつ。もしかして放置プレイですか。そうですね？  
じらそうってことですね！？ えへへへ。シャノンさんの愛を感じ  
ます……

シャノン：おい変態！ 今何かもの凄く悪寒が奔ったんだが、ナニ

やった！？

フェアリーのチャットと同時。形容し難い悪寒が背筋を舐め回し、思わず反射的にチャットを返してしまふ。馬鹿が！ これじゃあ、相手の思っ壺だろっが俺ッ！

内心で自分を罵倒するが時は巻き戻らない。それはこの機械仕掛デウス・エクス・マキナの神が支配する電腦世界でも不変である。

フェアリー：あっ！ やつと反応してくれましたね！ シヤノン先輩はフェアリーにもつと優しくするべきだと思います！

シヤノン：はいはい。お前のおふぎけに付き合っている余裕は俺にはないんだよ。でっ？ 重複するけど来るのか？

フェアリー：勿論です！ シヤノン先輩に合う為に私は正式にも参加したんですからねっ！ 場所はどこですか？ 箒星の如く刹那に駆けつけて見せますよ！！

テンション高いなオイ。見てもいないのに、ノリノリでキーボードを打ち込む姿が想像出来るんだが……

それに規模もあるが、箒星なんか来たら死ぬぞ。俺も、お前も。残念ながら。こいつのPS プレイヤースキル は高い。ここで抜かすのは選択肢としてあり得ないとさえ言える。

溜息一つ。俺は顔を顰めながらも現在位置を打ち込んだ

## 第九話 パーティーを募集しよう！（後書き）

後書き

亀速度の展開に我ながら頬が引き攣る思い。申し訳ない。  
主人公のブレが暗示といえど酷い。後から最初の方改訂するかもし  
れません。

## 第十話 予定調和の再会

「さつて。俺はどう口にすればいいんだろうな。このメンバー」

「先輩！　これが運命サダメってやつですよ！！」

そう言うてにつこり笑う妖精のような容姿を持つ少女。背中のはまである緩く波打った空色の髪は艶やかで、その顔は日本人ながら、ずいぶんとメリハリのある顔立ちだ。

瞳は大きく髪と同じ空色。睫毛は邪魔になりそうな程重そうである。眉は細くも綺麗な山形を描き、その二重の目蓋はよりくつきりと目を印象付けている。

小鼻ながらも形良く整い、その小さな唇は綺麗な桜色に染まり、張りも良さそうだ。

百六十あるかないかの身長は一昔前ならそれなりに高い方だったろうが、現代じゃ平均と言ったところだろう。

華奢ながらその胸部は程よい盛り上がりを見せ、なにより肌が黄色人種らしからぬ白さ。

嫌々ながら認めてもいい。妖精と自称するだけはある容姿。俗っぽく言えば美少女だ。美女じゃない。なんせどうみても二十に届かない、精々が十八前後と思われる、どこか僅かな幼さを感じられるからかもしれない。

「シャノンさんが正式に逸早くログインするのは分かっていましたからね」

そう言うて微笑むこれまた別の女性。フェアリーは俺と同じ皮鎧だったが、こちらはローブアラバスターに身を包んでいる。身長百五十五程、これまた白い肌はまるで雪花石膏のようだ。

腰元まである天使の輪が美しい艶やかな紫色のストレートロング。常に微笑を浮かべ、八の字気味の眉に瞳。

恐らくは成人しているだろうと思える落ち着きを持つのだが、見た目だけならまだ十代で通用するだろう。容姿に見合った性格なのだが、どうしてこんなゲームをプレイしているのか分からない。

性格はロールプレイの可能性もあるが、それにしてもどうも雰囲気ゲームをする女性に思えなかった。

何より特筆すべきはその胸部。ローブで分かり難いがメリハリの利いた肉体に、その明らかに九十程はあるだろう胸はお子様にはきつと目に毒だろう。

「それでもまさか、こうもあっさりとテスト時の知り合いに出会えるとは思ってなかったぞ」

「私はシャノン先輩の事だろうし、チャットに気を配っていればそのうち見つかるんじゃないかなって。思ってたけどね！」

「ええ。私も同じです。それに、私は回復職特化を目指すので、シャノンさんのような方と逸早く友誼を結ぶのが、レベル上げの近道でしたし」

なんだ。俺はもしかして分かりやすい人間なのだろうか。自分ではそれなりに物事を客観的に見て、冷静に対処出来ると思っていたのだが。

二人の意見を聞いてみると、どうも行動の読みやすい奴に見えてきてしまう。

「そんなに俺は分かりやすい奴か？」

「先輩は基本的に理性的。言わばより合理的に動く人なので、それを知っている人から見れば分かりやすいんじゃないんですか？でもでも、それってつまり先輩をよく理解しているってことですよね」

？　と言つことは　　えへへ……」

ナニを妄想し出したのか、フェアリーが腰をくねらせて手を頬に当てる。これが男ならキモイと言つてやるところだろうが、見目的には及第点以上の女性の為そうもいかない。

「でも。今日のシャノンさんは、ちょっと。前と雰囲気が違うでしょうか？」

その言葉ににやりと笑みを浮かべる。中々鋭い。

「ああ、フェアリーもテレサも付き合いはこのゲーム。しかもオーブンベータからだからな、知らなくて当然だろう。俺はゲームを変える、またはテストからテスト、正式などへ以降する度にゲーム内でロールプレイする性格を変えているんだ」

俺の台詞に驚く二人。まあ無理はない。いくらロールプレイとは言え、そう幾つもの、言わば顔を切り替え、しかも違和感なく行使するのは並大抵の努力では無理だ。

その為の才能。技能とも言い換えてもいいくらいの暗示。これがあるからこそその裏技と言えた。

「先輩先輩！　じゃあ今回はどう言ったロールプレイなんですか？」

なんだか瞳をキラキラと輝かせたフェアリーが顔をグツと突き出し聞いてくる。

純粹にこつとも興味深く聞かれては答えない訳にもいくまい。

「今回のコンセプトはクールでホット。そして戦隊バリのノリだった！」

気づけば勝手に腕が動き、ずびしッ！ と奇妙なポーズを取ってしまっていた。これも暗示の効果だ。下手すれば戦闘開始時に何か可笑しな名乗りを上げかねないな、これは……  
それすらも今の俺は良しと思っっているのだから、我ながら恐ろしい。

「なるほど。そのポーズが戦隊的なんでしょうか？ でも、シャノンさんの容姿はお世辞にも熱血キャラのような暑苦しいものではありませんので、少し違和感があるような、でも似合っているような……不思議ですね」

何だか「おおー！」と口にし身悶えるフェアリーとは違い。テレサが的を射た意見を口にする。

そうなのだ。確かに行動や思考は暗示でどうにでもなるが、容姿まではそうもいかない。どう見ても自分の容姿は熱血馬鹿とは真逆の、理知的ながらやや皮肉の似合うようなものである。

正直見る側からは何とも言えない違和感を感じるかもしれない。未だ保っている腕のポーズを解除し、ウィンドウに目をやるがどうやらこれ以上は参加者が集まる気配はなさそうだ。

パパッと文章を打ち込みエンターキーを押す。PT上限の人数ではないが、どうせこうも知り合いばかりでは野良の人が気まずくなるだろう。

シャノン：重複クエPT。参加を希望してくれた人には感謝を。

と言う文章がウィンドウに反映されたのを確認し、そのまま消さずに立ちあがる。たまに面白い情報が流れる為、慣れたプレイヤーなら常に表示しておくのが習慣だ。

「先輩、募集締めちゃうんですか？」

「時間が勿体無いのもあるが、これで新規の人が来ても気まずいだろうしな。つーことで、早速出発するか。目標はなんせ十レベルだ」  
「シャノンさん、随分と大きく出ましたのね」

まあそうだろう。いくらゲーム内が現実より早く時間が流れると言っても、今からじゃ精々現実の五時間分くらいが限界だろう。

ゲーム時間で換算すればざっと二十時間程だろうか。決して無理な範疇ではないが、それでも中々にハードモードだ。

それでもいけると俺は確信している。二人ともVRゲームのセンスが高い。特にフェアリーは見た目名前負けしない容姿の癖に、やたらと戦闘センスが高いときた。

更にこのゲームじゃ“才能”すら後天的に得られる。恐らくこの先もメキメキと実力を伸ばしてくるだろう。

テレサだって回復職としての有能さは折り紙付きだ。そこに前衛として俺も機能すれば、最低限でありながら重要な盾・火力・回復の職が揃う事になる。

「俺はこのメンバーなら十分いけると思ってる。時間さえあれば、もっと先も目指したいくらいだ。覚悟しろよ、ログアウトしたいって言っても、返してやらないからな」

にやりと口角を持ち上げる。テレサは「あらあら」なんて口に出しているが満更でもなさそうだし。

「先輩にそもそも期待されて本気を出さなきゃ、女が廃るってものです！」

フェアリーにいたっては何だか間違った発言までする様である。

だが俺の先の言葉は事実。折角テスト時の仲間である内の二人に出会えたのだ、ここでトップを目指さないで何時目指すのか。グツと拳を握りこむ。目指すはレベル十。そこから各人の個性で、それこそ戦闘スタイルが千変万化に変化していく分かれ道。

「よし、それじゃあ行くかつ！」

「おーっ！」

「はい！」

威勢良く返事を返す二人に気分を更に良くし。俺は堂々と重複クエを受けに向かった……………

## 第十話 予定調和の再会（後書き）

後書き

次回からは結構小さな展開はキンクリしながら進んでいきます。  
今までのように道筋全部描写していると、文字数いくらあっても足りなさそうですからね^^；

## 第十一話 レベル上げをしよう！ その一

「セツ！ ハツー！」

鋭い呼気に合わせて肉体が勇猛果敢に踊る。武器など必要ない。男なら己が肉体で十分だ。幸い俺には恵まれた外国人譲りの身長リーチがある。

そこにスキル“肉体運用”による“最適”な肉体の動かし方、そのぼんやりとした感覚を取り入れ軌道に混ぜ込む。それらの動き、戦闘は更に戦闘経験が纏め、効率的な戦闘法を徐々に確立させていく。

経験を積みれば積むほど、戦闘経験のスキルは俺に有利に働いてくれるだろう。

このゲームでの俺はましく、“拳”を扱うに適していた。いや…  
…肉体を扱うのに適している。

「終わりだッ！」

過去のVRMMOからも引き継いだ戦闘の経験から、ここぞと言う隙を見出しその無防備な頭に強烈な回転蹴りを叩き込む。

女性ですら難しい腰の開脚を見せた俺の足が、まるで右から喰らい付く猛獣のように、そのこめかみにスキル強撃で威力を増した踵が衝突。

一時的に限界すら超えた威力を發揮した一撃はその小柄な猿の魔物を隣の木に吹き飛ばしそのまま絶命させる。

同時にウィンドウに表示されるドロップ、経験値、金、そしてレベルアップ。

「さっすが先輩！ その惚れ惚れするような動き……憧れますッ！」

「！」

「いやいや。見てないで手伝えよ……それに俺の場合はVRMMO  
長いからな。嫌でも肉体の動かし方なんて覚えるさ」

「それはどうでしょうか。少なくとも私はそこま<sup>わたくし</sup>で上手に分<sup>アバター</sup>身体を  
扱う人を知りませんもの」

テレサの誇張なしの言葉に少し戸惑う。彼女は俺ほどゲーム経験  
は無さそうだし、偶々出会ってないだけだろうが。

「参ったな。嘘は言っていないんだが」

俺に才能が無いとは言わない。だが恐らく才能だけならフェアリ  
ーの方が、こと戦闘に関してでは高いだろう。分身体を持つ、“こ  
の世界での才能”を含めれば俺に軍配が上がるだろうが、それも後  
々成長系スキルを身に付ければ覆ってしまうに違いない。

それにフェアリーは大げさだ。別に大した動きではないし、大部  
分はこの世界のスキルに助けられている。現実で同じことをやれと  
言っても、正直無理だろう。

「シャノンさんに色々聞くのは楽しいですけど。次の“狩場”に行  
きませんか？」

「ほへ？別に私はここでもいいんだけど」

「フェアリーもテストに参加していたなら。ここよりこの先の湿地  
帯、そこに出現する“ソルジャースライム”の方が、クエ的にも経  
験値的にも。そしてドロップ的にも美味しいのは知ってるだろ？」

そう言うとフェアリーの瞳が上下左右に揺れ動く。見事なまでの  
挙動不審。正直あまりにソレっぽくて逆に演技のように思えるのだ  
が、テストからの付き合いでどうも素らしいことは分かっている。

テレサが微笑ましいものを見る目をし、俺がジト目を向ければ遂

に耐え切れなくなつたのか、ガバツ！ と両腕を天に突き出し、そのまま威勢良く口を開いた。

「ど、どうでもいいことだから忘れてただけだよ！！ そ、それよ  
り時間が勿体無いし早く行こうよっ！」

ほんのりその白皙の面を赤に染め、手をぶんぶんと振り回しながら一人先に走り出す。何となく動物に例えるなら犬だろうなどと、そう思う俺は可笑しいだろうか。

「おいおい！？ いくらこの辺りの魔物がレベル一か二だからって、一人で駆け出す馬鹿が居るかっ！ テレサ、追うぞ」  
「ふふ。はい分かりました」

たつく。まるでやんちゃな餓鬼のようだ。これなら俺の知り合いの双子の方が理性的だぞ。

皮鎧を着けているとはいえ、既にこの辺りの魔物狩りで数時間。レベルは全員四に到達している。クエの報告をすれば更に一は上がるだろう。

俺はVITメインでステータスを振っているが、逆にフェアリーはSTR寄りのその他バランス型だ。その力は既に俺より随分と先に行く。

AGIの力もあり、中々追いつけない。それに回りはそう間隔は近くはないまでも、木々が生える林地帯。中々思うように速度を出せないんだが、それを気にした様子も無くフェアリーは走っている。これは追いついた後、ちょっと一言言ってやらないといけないな。そう俺は決断し、走りに集中し出した……

「雑魚が相手だからPTで戦闘している訳じゃないが、それでも一応は団体行動なんだ。勝手な行動は頼むから勘弁してくれ」

「……ご、ごめんなさい先輩……テレサさん」

「構いませんよ。お陰で早く着きました。“経験値増加ポーション”の持続時間を考えれば、走って正解でした」

そう言っただけで茶目つぶりにウィンクしてみせる。確かに課金で購入出来る経験値増加POT 時間内の間、戦闘で得られる経験値が三十パーセント上昇する。はその効果時間がゲーム内で三時間と短い。

ここまで走ってきたお陰で短縮出来た十五分ちょいは、そう悪くない勘定だろう。お陰様で俺はともかくテレサもフェアリーも息が上がっている。

俺はVETの影響でスタミナは既に生前と変わらないレベルだから、あの程度の距離と時間は問題なかった。

「誰かPTが居るかと思ったが、居ないな」

グルリと、街から東に数キロ先の林を抜けた先にあった湿地帯を見回す。通常よりあしの長い草が生え、ジメツとした空気。うっすら霧の掛かった風景。

瞳を凝らせば何か体長一メートル程の不定形のシルエットが、あちらこちらで蠕動しているのだが、どう見ても人ではない。

「この湿地帯広そうだし。霧も掛かっているから見つけられないんじゃないんですか、先輩」

「それにソルジャースライムって、不人気の魔物でしたから、その

せいもあるのではないでしょうか？」

二人の意見は尤もだ。特にソルジャー・スライムは沸きもドロップも経験値もいい癖に、実はあまり人気ではない。とある重複クエの対象でもあるから、かなり美味い魔物なんだがな。

と言うのも、適正レベル四〜六の魔物ながら、その不定形の動き、予想し辛い触手の一撃、不気味な見た目、足場の悪い地形。

正直VRMMO初心者が知らず来た場合、間違いなく死亡確定だろう。言わば玄人向けの狩場と言えるかもしれない。

「まっ、広いと言っても数キロもない。かえって都合はいいだろう。それじゃ取り敢えず三十分毎にこの場所に集合で、基本的に俺は一人、そっちは二人で行動してくれ」

「え？ みんなバラバラじゃないんですか、先輩」

テレサは分かっているようだが、どうもフェアリーには伝わらなかったようだ。

「俺はこの中で一番防御力が高い。反してフェアリーは低く、少しでも被ダメを減らすのなら一人でも戦闘参加者が少ない方がいいだろう？ それに、今はまだまだ俺の方が“上手い”」

そう言うのにやりと笑って見せるとフェアリーが食って掛かってきた。

「むむ、むむむむ！ 悔しいけど、事実ですから言い返せないです！ でも、何時か先輩より戦闘上手になって見せますっ！ そうと決まったらテレサ先輩、ハリーハリー！ 先輩を見返してやるですよー！...」

息も荒くやる気を見せ、早く早く！ とテレサを引つ張っていく。もしかしたら俺が思っているより歳は下なのかもしれない。

いくらベースがリアルでの容姿とは言え、ある程度弄ることは出来るから、実年齢より二・三歳上に見せる事も可能だ。

「俺も行くか」

笑みを浮かべ。それこそ妹でも見るような瞳で、フェアリーと奥に消えていったテレサが見えなくなるのと同じ時、俺もゆっくりと歩き出した……

又チャ又チャと不快な音を響かせつつ、シルエットの一体に忍び寄る。数分もしないでその姿が目映った。全体的に中心部が盛り上がった半液体状の肉体。

色はヘドロのようであり、端々にはまるで獲物を探すかのように伸びた触手のようなものが蠢いている。

スライムソルジャーと呼ばれる、レベルーで出るスライムの上位互換。幸いこちらから攻撃しない限り滅多に襲ってこない。

俺はグツと腰を屈め、足腰に力を溜め込みそのまま力強くぬかるむ地面を蹴り出した。瞬く間に距離が零へと近づく瞬間、スキルポイントで強化した強撃を発動。

渾身の一撃を込めた無骨な“蹴り上げ”を放ったッ！！

## 第十一話 レベル上げをしよう！ その一（後書き）

後書き

暫くは戦闘描写交じりのレベル上げです。一話二話で終わらせると  
思います。

その後は一端日常に戻ります。

結構いろいろキャラ出していけたらと思っています。

と言つか。珍しくキョヌーキャラ出したな……作者は基本ヒンヌー  
派。

お気に入り、評価して下さい。ありがとうございました。どうもあまり受け  
はよくなさそうですが、作者自体はノリノリなので進みますw

## 第十二話 レベル上げをしよう！ その二

グニヤリとした感覚が足に伝わり、一瞬後その感触が硬い物に変化。大半のスライム種がこのゲームで持つ、瞬間硬化能力。それを逆手にとり、本来効果の薄い物理攻撃、それを“衝撃”と言う形で浸透させる！

同時即座に足を引き戻す。足場が悪いから、油断していると転んで盛大な隙をさらしかねない。

「さしずめホームランでところか？」

見事に一、二メートル湿地を滑空するように吹き飛んだスライムを見て呟く。本来スライム種は物理耐性が高いのだが、物理にも幾つか属性がある。

その内の衝撃はスライム種に中々の効果を発揮すると言うのは、テスターなら周知の事実だ。そして拳は打撃と衝撃に重点を置いたスタイル。

物理属性でありながら、スライムとの相性は悪くない！ と言っても弱点でもありはしないが……

「っつ」

吹き飛ばした距離を詰めるとそのプルプルの身体が震え、一瞬後に鋭い鞭と化した触手が振るわれる。

足元をなぎ払うかのような一撃を軽くジャンプし回避。その程度の攻撃が当たるなんて幻想、抱かれては数々のVRゲームを経験してきた俺の過去が泣こうと言うものだ。

そのまま身長差でギリギリ届く場所にある、頭部と思われそうな場所に拳を振るう！

瞬間的なゲルの感触に続き、硬質的なナニかを殴る感触に変化。そこを狙い、即座に足技に繋げる。

ミドルキックが硬質化した部分に命中。そこから更に拳の乱打を放つ。気分は今やボクシングだ。

「悪いが、一撃二撃じゃダメージにもならないぞ」

振るわれる触手。それを一步踏み込み、威力が発揮される前に“わざと当たる”。それによりライフが殆ど削られていないと、感覚的に理解。

一昔のMMOとは違い。VRならではの当たり判定。場所や速度により与える、受けるダメージは大幅に変動する！

「これで終しまいだッ！」

拳の雨に当てられ、確実に動きが鈍ってきている相手の弱った触手の一撃を“叩き落す”。そのままボールでも蹴り上げるかのように、強撃、パワーアタックで強化された足を繰り出す。

ゴッ！ とスライム相手とは思えない音を放ち、その十数キロ以上はあるだろう肉体が数十センチ宙に浮かぶ。

そこに新たに取得したスキル“速撃”、フラッシュアタックを発動。一撃のみ攻撃速度を飛躍的に向上させる効果により、俺の回し蹴りが残像すら伴ってそのゲルの身体に突き刺さる！

「オラアッ！！」

速度とはエネルギーだ。つまり、高速の一撃は相対的にその威力を底上げされる。気合一声、インパクトの瞬間更に腰を捻り、そのままグツと足を振りぬく。

正直、強撃程の威力ではないが、それでも止めには十分。そのゲ

ル状の肉体が地面に落下すると同時、ブルブルと震え、数秒後まるで水のように周りに溶け出し消える。

「まずは一体目だな」

ウィンドウを見れば先程まで戦っていた猿の魔物。それより二倍以上高い経験値に金、そして重複クエの対象アイテム。“スライムソルジャーの粘液”がパーティー内でランダム分配された事が表示されている。

それを確認し、新たな獲物を求め俺は薄霧に包まれた湿地を歩き出した

幾度目かの合流をし、課金のMP、HP回復セットでヒットポイントやマジックポイントを保ちつつ、狩を続行してから更に数時間……

『先輩、先輩！ フェアリー、レベルが六に上がりましたっ！』  
「ソイツは良かったなツと！」

音声チャットで嬉しそうに報告してくるフェアリーに返事しつつ、もう数十体目になるスライムソルジャーに終わりの一撃を叩き込む。フラッシュアタックによる最速の拳が命中し、そのまま地面に消えていく。速度上昇により、肉体が拳に引き寄せられるが、しっかりと重心を保ちそれを制御。

「ふう」とため息を吐きレベルを確認するが、未だ俺のレベルは五。もう二、三体で六になるだろう。

リアル時間で一週間戦闘による経験値を十五パーセント上昇させる、期間契約の課金と経験値上昇POTを併用してこれである。

動く死体の経験値十パーセント低下が如実に現れているのだろう。  
リベンゲデット  
と言っても、契約やPOTはフェアリーもテレサも使っているが。

『ありや、先輩戦闘中でした？』

「いや問題ない。今倒したばかり　おっ」

『あら。レア装備ドロップしたのですねシャノンさん』

「しかも先輩に分配！　流石ですシャノン先輩！　青字ドロップつて、百体以上に一個程度の確率だった筈ですよね!？」

「ああ俺もそう記憶している。ちょい効果とか確かめるから、俺は黙るな」

二人から了解の声を聞き、俺はウィンドウに目をやる。

「スライムソルジャー　は　名工のソルジャースピア　を落としました」と書かれており、その装備名が青字に輝いている。

アイテムには所謂レア度つて奴がこのゲームには存在していて、最下級が白文字。その上が緑字で、武器名の頭に何々のと、何らかの名称が付く。

そして更になが青字。そして更になが赤字で最高ランクが金字らしいが、俺は見たことがない。テスト時も最高で赤字しか所持していなかった。

大雑把に言えば、白が有り触れた一般品。緑がちょっとした能力が付いた品、青が名品。そして赤字が伝説級レジェンドになり、最後の金字が世界級ワールド。神話で伝えられるようなレベルになる。

アウターワールドをプレイする奴なら、金字や赤字の所持は一種のステータスだ。それも金字なら誰もが憧れることだろう。

俺の記憶じゃ、テスターで金字を所持していたのはギルド“ホワイトナイツ”の団長と、副団長の双子の少女くらいだったと記憶し

ている。

噂じゃテストでは大部分の金字装備が封印されていて、正式では入手率は上がると言われているが、実際どうなるかは分からん。

こつ聞くと、青は大したものじゃないように思えるが、名工って言えばかなりの業物だ。ゲーム内で言えば、青字装備複数で一人前って感じだし、青で装備を固めていけば十分と言えるだろう。

それにまだまだゲームも始まったばかり。相対的に数は少なく、この槍の価値は高まる。ウィンドウの装備名をクリック、するとこの槍の詳細な能力が表示された。

〔名工のソルジャースピア（ランク6） STR+7 DEX+2  
三パーセントの確率で攻撃時、対象の物理防御力を無視してダメージを与える〕

軽く驚く。どうやらこれは当たりを引いたようだ。アウターワールドでは装備に攻撃力や防御力の概念はなく、ステータスを向上させる効果のみがある。

また、装備名の次のランクは言わば装備出来るようになるレベルであり、同時にその能力向上率の目安だ。白字ならそのランク相応分の数値で能力が上昇。

緑字なら約一・二倍の数値、青なら一・五倍、赤なら二倍、金字ならそれ以上と言うのが各色の平均だった筈である。

そこに更に青字以上でなんらかの能力がランダムで付与されるのだが、今回ののはそれなりに有用だろう。

なんせ通常の一撃にも適用されるため、数字上では低いように見えても、発動する回数は決して馬鹿にならない。

惜しむらくはこれが拳装備じゃなかったってところだろうか？

「おーい。フェアリー」

『ほつよっ！ ほへ？ つとと、先ぱ わわ！？ ちょ、ちょつと待って下さいね！?』

「あー……悪い。戦闘中だったか。倒したら言ってくれ」

取り敢えず合流地点に向かっておく。どうせそろそろ時間だ、問題は無いだろう。最初はこのジメジメした空気につんざりしたが、もう何時間とこの場に居るせいか、すっかりと慣れてしまった。

連戦の影響か、無視できない疲労も溜まりつつある。課金のPTは疲労回復効果もあるが、それも完全ではないし、流石に疲労の為に湯水の如く消費するのは戸惑われた。

『あつ、先輩？ もう大丈夫ですよ』

どうやら倒し終わったらしく、フェアリーから音声チャットが入る。PT内でのみ聞こえるシステムだから、エリアやワールドに響くこともない。

「了解。そっちもそろそろ疲れたんじゃないのか？ 一旦合流地点で休憩にしよう。疲労でやられて、デスペナルティなんてくらつたら目も当てられないぞ。ついでにそこでさっきドロップした青装備、槍だからフェアリーに渡す」

そう言つと向こうからなにやら驚いたような、息を呑むような音が聞こえてくる。フェアリーは槍使いだから丁度いいと思つたが、まずつたか？

「うつつうつつ……先輩流石です……その優しさが私、フェアリーの心を掴んで離しません!」

あー、うん。まあ、喜んでくれるならいいんだがな。少々オーバー

すぎないか？

『でもよかったですかシャノンさん。マーケットに流さなくても？』

「問題ないさ。第一、今流しても青装備の相場を支払える奴なんてまだいないだろう。それなら次の繋ぎとして持って置いて、後から適正価格で売った方がいい」

そう言えば『なるほど』と、テレサが理解の声をあげる。一方のフェアリーは先程から一人芝居に夢中らしく、正直暑苦しい。女性相手にそれはどうかと思うが、やはり暑苦しい。

容姿は名前負けしないのに、どうしてこども喧しい性格に育ったのか、世の中はまったくもって神秘に溢れている。

「それじゃあ先に俺は合流地点で待ってる」

『了解です先輩ッ！』

『分かりました』

二人の返事を耳にしつつ、俺は黙々と陰気な湿地帯をウィンドウのマップを確認しながら歩いていった………

## 第十二話 レベル上げをしよう！ その二（後書き）

後書き

あー。うん。またもスーパー説明ターンでした。攻撃力とか、防御力とか、面倒だったのであなりました。重複クエは後二話程で終了出来たらいいな。

それじゃあ、最強モノでも、ハーレムモノでも、成長系なのかも怪しい誰得な本作品ですが、感想や評価、お気に入りや誤字脱字お待ちしております。

追記：レア装備って浪漫ですよね！

### 第十三話 初めてのボス戦

「あら？ シャノンさん、あれってもしかしてフィールドボスじゃないでしょうか？」

合流場所で休憩しつつ、ドロップを確認しながら槍を渡して十数分。そろそろ狩りに戻ろうかと言う頃、テレサが薄い霧に包まれた湿地帯の一角を指差した。

俺も視線を向ければ、スライムソルジャーを倍にしたような体躯のシルエットが見える。テストでも見かけた事もあるし、間違いないだろう。

「本当です。今まで見なかったけど、ポップしてなかったんですね先輩」

確かに今までずっとこの場で狩りをしていたのに、一向にフィールドボスが湧かなかった。

フィールドボスつてのはその名のとおり、一定の広さ毎のフィールドで出現するボスモンスターだ。別個にレイドモンスター呼ばれるボスも居るが、基本はフィールドボスの方が格下扱いになる。

レイドモンスターは単一種、ようはその一体だけしか存在しない事がほとんどだが、フィールドボスは大抵そのエリアに出現するモンスター、その中のどれかが肥大化した姿だ。

「無視してもいいんだが、確かあのボスが落とすドロップってサブクエの対象だった筈だし、狩るか？」

PT全員にドロップ確定のクエストアイテム。サブクエの名前は忘れたが、報酬は経験値と金だ。湧く時間がランダムのフィールド

ボスが対象なだけあり、経験値も金も通常の報酬より破格である。

「けちよんけちよんにしてやるですよ。なんたって、先輩からもらった槍もあるんです！ 肩慣らしには丁度いい相手かな」

そう言うつやいなや、準備体操を始めるフェアリー。なんだかじつとしている事が少ない。身体を動かすのが好きなのかもしれない。

「テレサはどうだ？」

「私も特に問題ありません。折角の機会ですし、逃すことはないでしょう」

「そっか、じゃあ決定だな。雑魚とは違って仮にもボスだ、能力値もスライムソルジャーより高い。それにボスは総じてタフだからな、油断せず行こう。基本は俺がダメージを加えつつタゲを維持、俺のダメを上回らない程度に二人は攻撃してくれ」

一次職になるまではヘイト増加系のスキルは覚えれない。だからこそその俺の発言だが、かなり難しい。ウィンドウを見れば履歴としてダメージが数字化されるが、激しい戦闘の場合、それを見る余裕はあまりないだろう。

幸いフィールドボスは雑魚召還などの厄介な特殊スキルを持たないから、俺さえしつかりすれば二人はのんびりウィンドウを確認する事も出来る筈だ。

まあ、問題があるとするれば……

「でも先輩。それじゃあ先輩に負担かかりませんか？ 手持ちのPOTだって殆ど課金ですよね」

「フェアリーさんの言うとおりです。流石にそれは気が引けるのですけれども」

フェアリーの常ならばテンションの高い声音が今はなんだか沈んでいる。テレサもそのややおっとりした声音を変え、申し訳無いと言う想いが籠ってる。

そう。今の俺のレベルは八、二人は九。ボスの適正はそのエリアの平均レベル＋五辺りだから、ここなら約十。装備も貧弱だし、いくら防御メインのステータス振りをしている俺でも、相手の一撃はそれなりにヒットポイントを削ってくれるだろう。

それでも問題はない。回復職が居ない場合のPOT負担は盾役なら当たり前。バツファーが居ないときのブースト系アイテムを用意しておくのも、優秀な盾なら基本だ。

二人が引け目を感じる必要はない。それを承知で俺は盾役を目指すのだから。

「と言っても、恐らく二人じゃ一撃もらっただけでもかなり不味いだろう。下手すれば即死の危険性もある。それに盾役が雑貨で金を食うのは優秀な盾の証だからな、何も気にする必要はないさ」

二人共テストでは良い盾とはめぐり合えなかったのかもしれない。俺もテストではそこまでPOTを消費しなかった。回復職もバツファーも居たし、そもそも課金はまだ導入されていなかったからな。

あんまりMMO経験が豊富とも見えないし、折角フレンドデータがリセットされた中でも再び再開したんだ、出来るだけ盾の偉大さを刻み込んでやるとしよう。

俺が最終的に目指すのはPTを組んだプレイヤー達に、「盾で組むなら〜〜だよね」と、陰で囁かれることだ。それは盾役にとつては非常に名誉なことである。

下らないことかもしれない。現実にはなんの役に立たない名誉だろう。だがいまや仮想は現実を侵食する時代、近い将来仮想の名誉は現実にすら影響を及ぼすに違いない。

「よし。行くか」

二人共頷く。俺たちは正式稼働から初の、ボス退治に向かった……

薄まったシルエットに向かって先頭を走る。後ろからフェアリー、その後ろにテレサ。ぬかるむ足場にバランスを崩さないよう重心を出来るだけ崩さない。

リアルでは難しいことも、肉体運用のスキルがそれを容易にしてくれる。

「見えた。先制する！」

靄が役に立たない距離まで詰め、抑えていた速度をトップにまで引き上げる。その二メートル程もあるヘドロ色の肉体に接近。強撃を発動し腰を捻りクルリと身体を回転、そのまま漫画もかくやと言う回し蹴りをその肉体に叩き込む。

着地の瞬間、慣性に引かれるように肉体が水を含んで滑りのよい地を、まるで引きずられるように移動する。それを前傾姿勢で堪え、こちらに気づいた“スライムソルジャーロード”が一本と言わず、複数の触手を俺に向かって振り回してきた！

「チイツ！ 小賢しい真似を！」

こちらに向かって胴薙ぎに振るわれた触手を右腕でガード。強い痺れと共にヒットポイントが削られる。さらに続く袈裟懸けの一撃を拳で相殺。ほぼタイムラグ無しで振るわれた唐竹割の一撃、拳を急いで引き戻し、速撃を用いて無理やり弾く。

速撃による前へ引く力、相殺した際の反発の力が均衡し上手くそ

の場に踏み止まれた。

「脇がから空きです!!」

脇なんてあるのか？ と言う疑問は置いておく。回り込むように近づいたフェアリーの横薙ぎが胴体に命中。更に逆から近づいたテレサが手に持った短剣を振るう。

「不味い!!」

筋力値の差でスキル使用した一撃と、フェアリーのただの攻撃が同程度のヘイトを生んでしまったらしく、ボスの肉体がフェアリーに向く。

「そんな一撃喰らわないよッ!」

振るわれる脅威の三連撃をバックステップで距離を保ちつつ、素人とは思えない槍捌きで次々触手を叩き落していく。

槍の才能に関する成長スキルでも保有しているのかもしれない。そんな考えを即座にリセット、今はその時間を有効に活用する!

「相手は悪いが俺に固定してもらおうぞッ!」

触手が威力を発揮しにくい懐に潜り込み、ローキックや膝蹴り、更にはジャブや円を描くように拳を振るい、そのデカイのを滅多打ちにする。

振るう、振るう。今俺は全身凶器となり、白熱した思考に従い凶器《肉体》を振るう!

「おおおおおおおッ!!」

拳の利点はその身軽さから来る手数！ クールタイムが回復する度に惜しみなく強撃や速撃を使用。スキルポイントで強化した為、MPがゴリゴリと減るが、課金のMP回復POTを思考使用で回復し補う。

同時に俺の肉体に触手が雨霰あめあられと降り注ぐが、密着もありその一撃は通常の半分の威力すら発揮しない！！

なら構わないッ！ 幸い知能が低いスライム種、退くと言う思考はないらしく、大人しく俺とのインファイトと洒落込んでくれている。

身を蝕む軽く殴られる程度の痛みも問題などないッ！ 拳を振るう。触手が身に衝撃を叩き込む、それを無視して速撃を叩き込み、その反発の衝撃で後ろに僅かに下がる。

そのまま一瞬で軽く腰を落とし強撃 パワーアタック を発動。渾身の“正拳突き”がそのゲル状の肉体に突き刺さるッ！

その横で安定したヘイト数を稼ぎ、俺に固定されたターゲットを崩さないよう、二人がボスに次々と攻撃を叩き込んでいく。

「ツツ！？」

ブルブルと身を震わせたかと思った瞬間、その肉体を勢いよく振り回す。同時に触手が暴れるように宙を舞い、俺の肉体は無論、全員の身体を打ち据える。

数歩分無理やり後退させられる中、視界の端で数メートルも吹き飛ばされる二人の姿が一瞬見えた。

一気に三割程削たれた体力、今までと合わせればレッドゾーン間近だ。急いでショートカットに設定している課金のPOTを使用。通常のクールタイムより短く、回復量もヒットポイントの十パーセントを毎秒回復、それが十回と優秀だ。

「二人共大丈夫か!？」

一旦倒れ込んだ二人から引き離すよう身を引きつつ声を上げる。身に走る痛覚の割合は、その受けるダメージ量で変化する。

二人が喰らった痛みは俺よりも幾分高い筈だ。それも覚悟もなしの不意打ちなら、その衝撃は増す。

こちらに合わせ移動してきたボスに拳を振るいつつ返事を待つがこない。僅かな不安が過ぎる、即死は免れたようだが、それでも最大での痛覚は打撲にも匹敵すると言う。継続しない痛みだが、それでも不安になる。

「ごほっごほっ……いたたた……お腹に入ったから息出来なかったけれど、もう大丈夫!」

「ええ、早く戻らないとシャノンさんにご迷惑をおかけしてしまいます」

どうやら無事だったようだ。内心でホッとため息を零し、割っていた集中を眼前のぶよぶよとした出来損ないのプリン野郎に全力で注ぐ。

「ハアアアアアアアアッ!」

己を鼓舞するよう気合を発し、そのまま再びインファイトに持ち込む。先程の攻撃は予備動作で肉体を震わせるのだろう。ならばもう喰らいはしない!

スパイラルピア  
「螺旋槍!」

突撃するように接近してきたフェアリーが全力の力で槍を突き込

んだ！ 逆巻く風のようなエフェクトを伴い、火力系の槍スキルが炸裂する！！

更に振るわれ続ける高速の突きにウィンドウを一瞬見れば、どんどんとボスの体力が削られていく。

「私も居ます！ ファイフスター 五連撃ッ！」

今まで振るうだけだった一撃、それが流れるような五連の連撃に変化する。まるで水流のように淀みのない高速の連撃は、高確率で発生する貫通効果で相手のHPを削っていく。

このままじゃ二人にターゲットを剥がされてしまうかもしれない。俺はそう判断し、もとより無視していた防御を捨てて捨て身の特攻をかます。

「オラッオラッオラッオラッオラッ！」

現実であれば間違いなく筋肉痛確定の激しい動き。ジャブのような牽制を込めた攻撃など既に無い。

あるのは相手を打倒するための破壊の一撃。懇親の拳が外円をなぞるように飛来し、その触手を叩き落とし、横殴りの速撃から慣性を利用し回し蹴り。

意識するのは嵐のような猛攻でありながら、次に繋がる流れ！ 攻撃とは次に繋げるものこそ真価を持つ。現実では修練の居る動きも、理想をすら超えられる“エレクトロ 電脳世界”なら可能！！

激しい。十分近くにも渡る攻防の末、終にスライムソルジャーロードが不気味に震え、そのまま地面に消えていく。

同時に俺のレベルは九に上昇し、ドロップが分配される。ボスは

必ず装備を落とす、しかも緑以上をだ。判定の運が良かったのか、ウィンドウにはクエスト用のアイテムが全員へと分配され、落とした“緑ネームの装備”が二つ分配された。

「流石に疲れた……にしても、やっぱりAIが強化されてるっぽいな。あんな身体を振り回して触手を乱暴に叩き付けるなんて技、あいつは持ってなかった筈だ」

そう一人呟くと、顔色を疲労で染め上げた二人がこちらに向かって歩いてくる。

「せんぱーい……流石にフェアリーも疲れたですよ」

「そうですね。激しい戦闘でした。あの回転の一撃の時、HPが残ったのは運が良かったのでしょうか」

「まっ、なにはともあれお疲れさん。とりあえずそろそろ街に戻るとうしよう。これならクエの報告で十までは行くはずだ」

俺の言葉に頷き、二人とも立ち上がる。結局この狩場では十時間以上居た計算になる。現実での時刻も当に深夜だ。俺はともかく二人ともログアウトしないと不味いだろう。

「さて。それじゃ戻ろうか」

### 第十三話 初めてのボス戦（後書き）

後書き

ちよい予約で投稿。諸事情で見直してないので、誤字脱字など多い筈。

帰ってきたら見直しします。

## 第十四話 双子来襲 その一

「ほお。まさかこんなに持ってくるなんてな。一応これなら十四回分の報酬と引き換えられるが、どうする？」

「頼む」

「分かった。少し待っていてくれ」

そう言っギルトて依頼斡旋組織の受付の一人。中年の男性がカウンターの奥へと消えていく。周囲を見渡すと俺以外にも数名、プレイヤーだと思わしき者達が居る。と言っても思う、で、確實じゃない。会話をしてもその返答が自然過ぎて見た目じゃ判断が難しいのだが、なんとなく雰囲気ギルトに差異を感じる。

リアルで言えばそろそろ零時をとうに過ぎ、一時か二時頃の筈。こんな時間までプレイしてる輩は。この先の廃人候補と言っている。俺はもう廃人確定コースだ。因みにテレサとフェアリーは街の入り口でログアウトしてる。フレンドカードの交換も済ませてある為、次にログインする時は居場所なども分かるだろう。

テスト時にはそう深い仲ではなかったが、今回は長い付き合いになりそうだ。

「待たせたな。これが依頼クエスト“魔法素材の収集その一”、その十四回分の報酬だ」

「クエストを達成しました。該当クエストを確認して下さい」

男の声と同時に、クエスト達成のアナウンスが脳内に響く。声音は妙に人間臭いのに、システム面を理解しているのか、言葉だけでも渡して来ないのが少し怖いと、そう思ってしまうのは俺だけだろうか。

黙って頷き、そのまま近くの来客席に座り込むと、メニューから即座に該当クエストを選ぶ。と言っても先程ボスのドロップが対象のクエは報告した為、後は今報告したクエストが俺の受けている全てだ。

因みにボスクエの報酬はスキルポイント上昇薬。今はまだしも、後半以降確実に差が出る重要アイテムである。

〔クエスト：魔法素材の収集その一 ランク6〕

内容：世界でも幅広く扱われている魔法素材の一つ、スライムソルジャーの粘液が在庫不足だ。五つの瓶をこちらから提供すらから中に詰めて持ってきて欲しい。

無論、報酬は相応に用意させてもらうつもりだ。もしこのクエストを受けてくれるなら、君の名はギルドで広まることだろう。

クリア条件：スライムソルジャーの粘液5/5

報酬：経験値1550 金55 依頼斡旋所名声30

となっている。これを計十四回完了させる。レベル九から十になるに必要な経験値はざつと五千、十一になるのに必要な分はざつと七千五百、十分にお釣りがくるだろう。

所持金にしても一気に七十シルバー、つまり、一G二十S。日本円で言えば七万円弱と言ったところか。ギルドの名声だけなら、下手したら現状トップかもしれない。

どうでもいいかもしれないが、ランクは受けられるレベルを示している。なんてことを無事レベルが十一になったのを確認し、俺はメニューからログアウトボタンを押す。

このまま一日中プレイするのも構わないのだが、あまりテレサ達とレベルを引き離すのは得策ではないだろう。

毎回PTを組む事になるとは思わないが、それでもこうして気にしておくのは円滑な関係を築く上で重要だ。

今は恐らくほぼトップのレベルも、明日には抜かれているだろうことを思い、思わず可笑しな笑みが零れたまま、俺の意識は徐々に薄れていった……

ピンポーン、ピピピ、ピンポーン。

『お客様がインターホンを押しています。現在、時刻午前八時四十六分、土曜日です。設定によりアナウンスを流します』

疲れていたのか、夢さえ見ない深い眠りの先。なにやら聞き覚えのある音が微かに聞こえてくる。

『再生します。「この時間帯で反応がないなら恐らく寝ている。後日出直すか、インターホン付属のメッセージ機能を使う か。不本意ではあるが、もう一つの急用ボタンを押してくれ』以上です』

「あれ？ まだ寝てる？」

「え？ でも私達が来るのって、前に伝えてたよね？」

「うーん……少なくとも私は知らないよ？ お姉ちゃんが伝え忘れた、とか……」

「はは、そんな事ない と、思う……な、なによお！ そんな目で見ないでよ！」

「だ、だって！ 折角兄様に会いにこれたのに、このままじゃ会えないんだもん！」

「大丈夫だって！ じゃじゃーん！！ これなーんだ」

「もしかして。合鍵？」

「ふふーん。その通り！」

「でもそれって、急用以外に使うなって……」

「リカは兄様に会いたくないのかなあー？」

「そ、それは……」

「会いたくないならいいんだよ？ 別に、このまま帰っても。あーでも、きつと帰ったらまた五月蠅い事言われて、習い事いっぱい待ってるんだろっなあ」

「うっ」

「でも、しょうがないわよね。兄様に迷惑掛けないもの、それじや帰り」

「お姉ちゃん待って！」

「んっ、何かな？」

「あ、会いたい。会いたいから、鍵、使ってもいいと思う……それくらいじゃ、兄様怒らないと思うし」

まどろむ意識の彼方。インターフォンに付属されている音声出力機が声を拾い、眠り中の自分に届けてくれる。

どうやら誰かが来たらしいことは理解したが、そもそもログアウト後に寝たのは午前の三時過ぎ。基本的な睡眠時間八時間以上を科している身としては、感覚から未だその時間に程遠いと分かる。

水鳥の羽毛に科学技術の粋を集めて作られたベットに掛け布団。その魅惑の魔力は睡眠と言う、ただでさえ抗いがたい魅力を極限にまで高めてしまう。

まあ、なんだ。つまり何が言いたいのかと言うと、俺はまだ寝ていたいのだ。わざわざ訪ねて来た客人には悪いが、後日出直してもらうとしよう。

では、今度は楽しき夢の果てにでも………

「えいつー！」

とお姉ちゃんが磁気カードを差し込むと、ガチャリと音が鳴り口ツクが外れる。

「あれ？ 開かない」

ガチャガチャとドアを引つ張るけど開くことはなく、私とお姉ちゃんは首を傾げてしまう。今までは大抵兄様が起きていたし、そうじゃない日もあらかじめロックを解除してくれたから、思わず戸惑ってしまう。

『指紋認証及び、網膜スキャンを行って下さい』

「だって、お姉ちゃん」

「もー！ 兄様、前に鍵だけだって言ってたのに！」

頬を膨らませてお怒りなお姉ちゃんだけど、本当は全然、ちっとも怒っていないのを知っている。私だって同じだし、何より私とお姉ちゃんは双子なんだから。

昔から双子は特別な絆で気持ちが双方分かるって言うけど、私達もなんとなく大雑把な感情を理解しあえる。だから本当は怒ってなくて、嬉しい気持ちが一番強いんだってのは分かっているんだから。

「えっと。これでいいのかな？」

お姉ちゃんが一人芝居を披露している間に、インターフォン下部のガラス状の部分に一指し指をすつと走らせる。

『指紋認証 完了しました。網膜スキャン開始……認証。生体情報を取得、カメラより画像情報取得。二名共情報登録されているこ

とを確認しました。ロックを解除します。ようこそ鬼無里邸へ、歓迎致します」

柔らかな女性の合成音声と共に、再度ガチャリと音が響く。それを聞き届けると、思わず私の頬は緩んでしまう。隣を見ればお姉ちゃんも似た表情だった。

「開いたみたいだよ、お姉ちゃん」

「じゃあ兄様を起こしに行きましょう。まだ寝ているみたいだしね」

私達との約束を忘れていたのはちょっと残念だけど。寝顔が見れるかもしれないと思えば、悪くないと私は思う。

お姉ちゃんも同じ気持ちなのか、その顔には悪戯っ子のような笑みが浮かんでいる。思わず私達の声が弾んでしまうのも許して欲しい。

お、怒らないよね兄様？ うん大丈夫、多分。兄様はそんなことじゃ怒らない。きつと……

## 第十四話 双子来襲 その一（後書き）

後書き

企画絵の参加や、当作品に出てくるキャラのキャラ絵の下書き用意したりと時間がなく、更新が遅れました。一段落ついたので、更新開始します。ついで、ずっと凍結していた人類は速やかに消滅しましたと言う小説も、一時間後くらいに更新予定。

今回日常編はサラッと終了し、すぐにゲームに戻ります。

## 第十五話 双子来襲 その二

「あつ！ 兄様兄様、これ兄様に似合うと思うけど、どう？」

そう言ってリーリカの姉、エールカが二十一世紀より以前で使われていた軍帽をどこからか持ち出してきた。記憶が正しければ、第二次世界大戦時、ドイツが使用していた規格のにやや似ている。

黒に近い深緑に金系の装飾。それをキラキラとした瞳でエールカが差し出してくる。

「早く着けて見てよ兄様！」

テンションも高く興奮した様子で捲くし立てられる。どうしたものと困っている俺を尻目に、懸命にその帽子を俺に被せようとするも、その身長は残念ながら百四十に届くか届かないかの瀬戸際だ。四十センチ以上も差がある為に、どうしても自力では頭にまで腕は届かない。俺の周りをグルグル回りながら、腕を伸ばす度に。その薄いブロンドの髪、右上で縛られた尻尾もとい、サイドテールがひょこひょここと可愛らしく踊る。

「はぁ……ほれ、貸してみる」

このままじゃこの小さな親戚の少女が転んで怪我をしかねない。しょうがなくその手から帽子を取り上げ頭に被る。

サイズは少しだけ大きいようだが、特に問題もなく頭部に収まった。そのまま視線を前に向ければ男性にしてはやけに長い長髪

後ろ髪は背中にもで達している。は常ならば縛るのだが、今は流され、前髪も全て後ろに流されている、言わばオールバックの状態で軍帽を被った長身瘦躯の男が鏡に映っていた。

「わあー……似合うかなって思ったけど、兄様、予想以上に似合ってるわ！」

「ええ、本当にお似合いですよお客様」

カウンターに居た女性店員が、にこやかにエールカの言葉に賛同する。

確かに目の前に映る男性は、その彫りの深い顔立ちながら、どこか東洋をも感じさせる切れ長の瞳。更にバランスよく配置された高めの鼻や、瞳に薄い唇、細めの眉。

色白ながら女々しさを感じさせない雰囲気、理知的ながら、どこか鋭さを合わせた容貌。これがあの父親<sup>クセス</sup>から譲り受けた容姿でなければ、素直に自画自賛でもしたかもしれない。

「そう言えば、さつきからリカの姿が見えないが、どこに行ったんだ？」

「リカなら……あつ、いたいた。リーカー！ 兄様が呼んでるわよ！！」

いくらここが広い店内で、周りは“衣装”ばかりとは言え、まさか大声を張り上げるとは思わなかった。すわ、店員に怒られやしないかと思つものの、傍に居る女性店員は微笑ましそうに見守るだけだ。

まあ、確かにリーリカもエールカも容姿は見事な金髪美少女と言えるし、年齢も十三とまだまだ子供と言っても過言ではない。これぐらいの事なら、思わず見逃してしまいたくなるのは俺としてもよく分かる。

エールカが手を振っている先に目をやれば、なにやら衣服を抱え込んだリーリカがこちらに笑顔で走ってくるのが見えた。明らかに己の身長より大きな衣服のせいか、何度か転びそうになるが無事俺

達の元まで辿り着く。

「あ、あの兄様。その、これ、似合うと思うんです。着てみませんか？」

姉と違い、左上でサイドテールにした女の子。エールカと瓜二つな容姿ながら、姉よりややおどした様子で、それでも期待に満ちた顔をして持っている衣服をそっと差し出す。

「あつ、それつてもしかして私が兄様に渡した帽子とセットのじゃない？」

「えっ？ 本当だ……お姉ちゃんのとセットだったんだ」

「流石リカだわ。好みが似てるのは伊達じゃないのね」

そう言うと二人の期待の視線が俺に突き刺さる。まあ、元よりいきなり我が家に来襲してきて、すわ何事かと思えばなんのことはない。

俺がすっかり彼女達との約束を忘れていただけだった。結局今日一日、と言つても日が暮れるまでだが、二人に付き合うこととなつてしまった。

日が暮れるまでとは言え、今は既に六月。真夏に突入する入り口であり、日が沈む時間も遅い。気温もここ最近は三十度近くを記録しているし、外からここまで歩いて来たものだから、その猛威を身をもって体験したものだ。

北極南極の温暖化防止の代わりに、それ以外での進行は二十一世紀から進み続け、遂には一ヶ月程季節はズレてしまつてから既に百年以上である。

砂漠化こそ、強力な緑化計画でむしろ緑を取り戻すくらいだが、生態系に対するダメージは避けようもなく、絶滅した種は数え切れ

ない。海洋汚染も今では浄化技術が進み昔を取り戻す綺麗さだが、過程で幾種もの魚類が姿を消した。

石油や石炭は既に枯渇してからこれまた百年以上経過しており、昔は危険だなんだと言われ、一時は縮小された原子炉などが、今のエネルギーを賄っているのは皮肉としかいいようがない。

その原子炉も今じゃ第七世代に到達し、事実上の完成系であり、安全性は核でも打たなきゃ揺るがないとされている。そんな完成したとさえ言える代七世代も、今じゃ数を減らし、稼動しているのは全国でも両手の指で数えられるだろう。

と言うのも、主流は原子炉から既に核融合炉に転換している為だ。暴走の危険性がない核融合炉は瞬く間に広がっていったが、それも既に百年近い昔の話である。核融合炉も既に第三世代に以降し終わり、その効率も昔に比べたら比較しようもない程と聞く。

宇宙開発も次々と企画が進み、月は旅行の定番。火星すらも今じゃテラフォーミング及び、居住区の建築中と。まさしく宇宙開発時代の先駆けが俺達の時代と言えた。

火星では新たな軽金属重金属が発見され、月でもその内部から新種の鉱石が発見され生活に溶け込んでいる。昔から見れば、さぞ今の時代は明るい未来に照らされた希望の世界に映るに違いない。

俺からすれば、仮想世界、電脳世界と逃避世界が増えたせいで、どいつもこいつも裏で何をしているか分からない表と裏の乖離が激しい、濁りきったヘドロのように汚い世界に見えてしかたがないけどな。

「……………さま……………兄様!」

「んっ? あっ、ああ。悪い。少し考え事に没頭していたようだ」

いけないいけないと頭を軽く振る。何が切っ掛けになるかは不明だが、どうも時折思考の大海原に飛び立ってしまうのは悪い癖だろう。俺の言葉に「そうですか」と、はにかむような笑みをリーリカは見せてくれる。姉は少し喧しいと言うか、快活な印象が強いが、妹であるリーリカは陰陽の陰のように一歩引いた大人しめの娘だ。

「で、兄様。もちろん着てくるわよね？」

にやりと意地悪げな笑みを浮かべエルカがずっと顔を突き出して聞いてくる。容姿が整ってるためにそんな表情も可愛らしい。

身長差もあいまって自然と上目遣いになり、ロリコンの気はないと思う俺でもそんな自己を疑いたくなる気持ちに駆られる。

妹と違い、エルカはその辺り分かってやっている節があるから始末におけない。尤も、そんなことされずとも、今日は無条件で可能な限り無茶を聞いてやる約束だ。

「約束を忘れてた俺が悪いんだしな。ほれ、それを貸してみる。流石にこの場で着替える訳にもいかないからな」

リーリカの手に持っていた制服状の軍服を受け取り、そのまま鏡の横に設置された試着室に入り込む。なぜかこの試着室は扉式と、カーテンで仕切っている二種類が多い。

曰く、カーテンタイプは昔からの様式美とのことらしいが、無論探知機などが設置されており盗撮防止は基本である。因みに入ったのはその伝統もあらたかなカーテン式だ。

あんまり待たせるのも悪いかと、手早く着ているスーツを脱ぐ。本当はジーンズなどで済ませたかったのだが、双子がどうしてもうのでこうなってしまった。

嬉しそうに「デート」なんてエルカは口にしていたが、周囲から見ればどう繕っても、精々が近所の姉妹をお守りする成年とされ

る少女達と言ったところだろう。

「……でも、だよ」

「見たい……だって」

何やらひそひそと話し声が聞こえてきたので、思わず着替えの手を止めて耳をすませてみる。

「兄様の裸見たくないの!？」

「だ、駄目、駄目だってお姉ちゃん! 兄様に怒られちゃうよ!」

「大丈夫だって! 私とリカが上目遣いで謝れば男なんてみんなイチコロだわ。兄様だつてきつと例外じゃないわよ!」

「そんな恥ずかしいこと出来ないよっ!」

思わず溜息がこぼれる。何を話してるかと思えば、覗きとは……

年頃なのは分かるが、何も俺でなくていいだろうに。せめて同年代か一個二個上の男性にしておけると言いたい。

そんな俺の思いを放り捨てヒートアップしていく二人。最早耳をそばだてる必要もないので、手早く着込んでいく。

幸い基本は制服の類と変わらないのが救いで、なんとか着込むことが出来た。サイズは少しばかり小さいようだがギリギリといったところか。

軍帽と同じ深緑を基調に、階級を示す部位は金糸で縫われ、他の装飾も同様だ。使っている生地も厚く丈夫なものらしく、普通の衣服に比べれば格段に重い。

最後に帽子を被り直す。靴は残念ながら革靴だ、ここまでくれば軍靴の一つでも用意しておけばよかったかもしれない。

なんて。後の祭りなことを考えている間にも着替えは終了。さて、聞いている方が恥ずかしくなる内容を口にして二人を止めると

しよつ。

「はい、そこまでだリカ、エル」

「あ痛っ!？」

「っっ!？」

カーテンを開け放ち様、目の前に居た二人の頭に拳骨を落とす。加減したつもりだがそれなりに痛かったのか、涙目で恨めしそうに見上げてくるが無視。

「何を覗く覗かないなんて口にしてるんだ。ここは一般客も居るんだぞ? 前途有望な未来の淑女レディがそんなでどうする」

「あっ…そうだったわ……」

「わ、忘れてました」

今更自分達の口にしていた事の恥ずかしさを理解したのか、二人の顔が熟れたリンゴのように赤くなっていく。

まったく。恥ずかしがるくらいなら最初から口にすると聞いたいくらいだ。姉はともかく、熱くなると周りが見えなくなるところまで、リ・リカも似なくていいだろうに。

「あ。兄様着てくれたんですね。とても似合ってます」

最初に再起動を果たしたリ・リカことリカが、心からと言った気持ちの籠った声音で口にする。

「本当だわ。やっぱり私達の見立てに間違いなかったのね」

続いて復活したエルカも手を叩いて嬉しそうに続く。最近少々

悪戯がすぎる感じもある二人、とくにエールカだが。見た目は精巧な西洋人形にも劣らぬ容姿だ。

そんな二人に似合うと言われれば流石に嬉しくもなる。それが社交辞令ではないと分かるだけに尚更だろう。

確かに客観的に鏡の前に立ち見れ見れば、長身に細身ながらしっかりとした筋肉。理知的な容姿もあいまってエリートの上官と言った風情だろうか。

戦線で戦うより、後方で指示を出す立場が似合いそうな雰囲気に見える。口々に感想を言い合う二人だが、何やら雲行きが怪しくなっていく。

「今度は何がいいと思う、リカ」

「えっと……貴族服とか、ちよつと見てみたいかも」

「あー、それいいわね。それなら私達もプリンセスドレスとか着てみない？」

「私も着るの？ は、恥ずかしいよ」

「何言ってるのよ。社交界に出る時、何時も似たようなものじゃない」

「で、でも……」

何やらこちらをチラチラ見てくるリカ。話の内容から察するに、俺が居るから余計に恥ずかしいのかもしれない。一応俺は気にしないとか、きつと似合うだろうとか、辺り触れない言葉を口にしつつ周囲を改めて見回す。

見える衣装はどれも言わばコスプレと言われるようなものばかり。そう、ここはその手の衣服を扱う専門店の中でも特に大きな店だ。

何をどう間違えたのか、双子はコスプレに数年程前から嵌ってしまい、更に言えばアニメなどにも詳しくなっていた。昔風に言えばオタクと言う奴だろうか、それも二次元と言うタイプ。

今じゃアニメや二次元は立派な文化だし、既にオタクと言う言葉は蔑称を含まないが……そもそも切っ掛けは仮想世界ヴァーチャルにある。

アレのせいで所謂厨二病とか言うのが叶い、それに合わせその患者が増大。同時にアニメオタクなども急増。以下紆余曲折あり、と言う感じである。

厨二病も既に蔑称を含んでおらず、今じゃ一種のステータスだ。VRゲームなどではそれを発症していた方が、何かと心強い場合が多いからである。

「じゃあ兄様。今度はこれをお願いするわね」

ふと思考の海原から戻れば、エールカがこれまた重たげな衣服を渡してくる。先程話していた貴族服だろう。それを溜息を吐きながらも受け取る。

どうやらもう暫くは彼女達の着せ替え人形を勤めないといけないようだ。今日はアウターワールドへのログインは、どうも遅くなりそうだと、今日何度目かも分からない溜息を俺は零した

## 第十五話 双子来襲 その二（後書き）

後書き

ここ一週間近く、登場キャラの案や下書きなど描いてました（汗）  
数ヶ月前から絵も描くようになりまして、七面八苦しながら上達せ  
んと足掻いてます。

昨日、内一枚が出来上がりました。と、言いつつ諸事情で主人公や  
登場済みキャラ外ではありませんが。

後、次回からまたゲームに戻ります。それでは、感想や評価、お気  
に入りなどお待ちしております。

と言うか、実はまさかこの作品が評価千超えるとは予想外でした……

<http://1596.mitemin.net/i27153>

/ リーティア紹介用

<http://1596.mitemin.net/i27154>

/ 背景有りver

ある程度キャラ画が増えたらキャラ紹介でも作って、そっちに全部  
載せようと思ってます。

ただ、マウス描きなので、一枚一枚時間掛かるので、いつになるや  
ら。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7008t/>

---

〔 電脳世界で踊れ 〕

2011年10月6日21時55分発行